川柳塔

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和四十二年三月二十五日　印刷
昭和四十二年四月一日発行（毎月一日発行）
（第一九号）

No. 19

特集・好きな句集

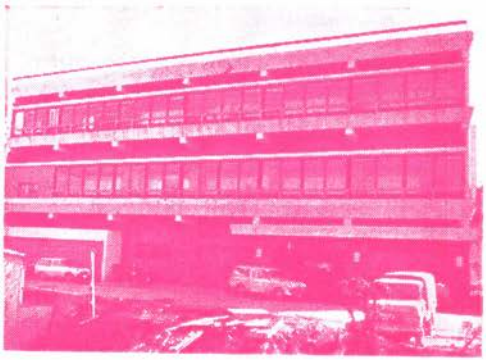
四月号

えらばれ
みがきぬかれた　灘の酒
超特撰　日本盛

超特撰（化粧ケース入）一八リットル詰・一三〇〇円

清酒
日本盛
ニホンサカリ
灘　西宮酒造　醸

国立公園　奥新和歌浦
・雑賀崎



国際観光旅館
うおまたろう
魚又楼

風光明媚な
海岸美を
誇る

TEL 和歌山（44）0431・1186(代)
大阪案内所　（641）3564

酒断って明日待つ夢がよく眠り
酒断ってよくよく能のない男
酒断った男に酒の害を説き
酒断ってから澄みとおる夢の底
酒断って朝のさやけさ飛び起きる

中島生々庵

今月のことば

◎無分別という言葉がある。前後の別もなく思慮のないことである。無分別な考えや行動は極めて危険を伴うことがしばしばある。分別の上にも分別をしてと古人は教えている。

◎極端という言葉がある。勿論本質的には全く違った言葉であるが、とかく無分別と一脉通じたがるニュアンスがあるようにも思う。

◎岡潔先生の言葉に「人は極端になにかをやれば必ず好きになる」とある。極端に打ち込めば必ず好きになるということである。

◎青山学院大学の市原豊太教授は「打ち込むということは青年の生きがいである。雪山の危険でもよい、ジャズでもよい、恋愛でもよい、共産主義でもよい。造物主の意思は、美と真と善に向って駆立てるよう、抜け目ない配慮をしている」と説いている。

◎仏教でいう無分別智とは又別の意味の無分別であって、衆生本来仏であるとの悟りの智即ち菩提心である。

◎無分別、打ち込み、極端、無分別智。ふと考えさせられたのである。

川柳塔四月号

川柳塔四月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

今月のことばと句帖……中島生々庵……(1)
川柳塔……(同人作品)……中島生々庵選……(4)
★好きな句集……(同人特集)……(24)
清水白柳・本田恵二朗・傍島静馬・不二田一三夫(到着順)
近詠……麻生葭乃……(19)
川柳二〇〇年……戸田古方……(28)
織田信長……(川柳戦国志・九)……冨士野鞍馬……(30)
秀句鑑賞……(前月号から)……後藤梅志……(40)
川傍柳初篇研究……(四十六)……(20)
前田喜代人・岡崎重義・清博美・藤井和雄・
川端柳風・故高須啞三味・丸十府・岡田甫・
中国寄席考……(大陸巷談)……東野大八……(22)

盲目抄

短詩川柳の発見者……吉田水車……(29)
きのうきょう……本多柳志……(44)
雅号ぶっちゃけばなし……宮尾あいき……(61)
真実……藤本礎山……(45)
売れる川柳考……吉田水車……(44)
近作柳樽……西尾栞選……(32)
十日町の雪まつり……阿部佐保蘭……(43)
たわごと……川端東雲楼……(45)
大萬川柳「代理」入選発表……清水白柳選……(50)
初歩教室……菊沢小松園……(46)
★柳界展望……(薫風)……(52)
★本社三月句会……(庸佑)……(54)
★各地柳檀……(文秋)……(58)
「倒産」……木村涼人選……(48)
一路集「花」……津秋六花選……(48)
「プラン」……友淵貴山選……(49)
★編集後記……白柳・一三夫……(64)

川柳塔

中島生々庵選

岡山県　田村藤波

此の恩は忘れませんとそれつきり
幸福は今朝もおいしくおみおつけ
フイルムが尽きて見付けたいい景色
土地ブーム一年先が見えなんだ
合格を念じて母の割る玉子
待ち呆け刻々募る嫉妬心

下関市　国弘半休

天草観光
手を揚げて天草五郎茲にあり
千人塚石の十字架着て眠り
遊船で降られ五橋を屋根にする
男心の三態
ほれて居るので女巻きあげる
ほれられて置けば女は弱いもの
相ぼれの男が嫉けば女すね

青森市　工藤甲吉

村一つ雪に埋もれて風うなる
貧乏は冬将軍と四つに組み
逃げ出せばバカにならない亀の足
執行吏鬼の使いの紙を張り
とんかつになる身が貨車で泣いて行き

宝塚市　黒川紫香

足だこをしみじみと見る山帰り
犬よんで出かけるつもりの声をかけ
口喧嘩しいしい晩の仕度する
一人ずつ集り終の山の駅
石段を上り仁王とにらめつこ

岡山市　服部十九平

紙芝居飴を買わない肩車
Uタンの出来ぬ一路を走らされ
お百度を踏む真剣な目へ黙り
煎豆を噛んで入歯をテストする
早熟であつたと女史の半生記

笠岡市　木山遠二

人は右ダンプはどつちでも走り
ダンプから見れば邪魔ものばかりなり
恩給をとりジヤンパーで自適する
本当を話して自慢臭うなり
敬老のつもりか自慢聞いてくれ

鳥取市　森本法泉子

焼跡にて

物蔭へ火元を呼んだは高利貸

総選挙

先生と云われる馬鹿をまた選び
検事判事弁護士判決二十年
出勤簿ないのを重役様という
物価欄銅や鉄より葱のこと

大阪市　正本水客

心見せまいと口数を多くする
だいぶ酔いましたと本題に入る話
自尊心のなかで暫くとぐろ巻く
ぜいたくをしよと毎晩ふろへ行く
ええやないのと優越感すてず

大阪市　後藤梅志

氷点下三度あだかも居催促
梅和らぐ生駒が近い霜ばしら

明治回顧（三句）

ゆんづるの響散歩のあしを止め
江戸川べりの柳を松井須磨子行く
万龍と照葉銀座の絵葉書屋

兵庫県　小西無鬼

選挙風景

あげ足の取り合いをして妥協して
かんじんの話へ苦が手がひよつこり来
課長ちう地位が石橋叩かせる
忘れ物も幹事任せで飲んで居り

諫早市　川岡霊眼子

老白髪交互にのぞく初鏡
登る程狭まる道に息がきれ
生きてさえ居れば逢わるる友が来る
正月の空指す平和像仰ぐ

京都市　大鶴喜由

春の風腋をくぐつて乳房を撫で
尼の耳へ女は恋に生きる唄
水底にされる故郷を発つ日が来
故里は見えぬと知りつのび上り

岡山県　直原七面山

背伸びした団地暮しに疲れ果て
無情に突き放すも恋のテクニック
分の厚い座布団へ客落付けず
南無阿弥陀仏の片手は足の裏を掻き

岸和田市　内藤きさ子

下水工事へ犬は一日吠つづけ
それでそ男ですよとおだてられ
有名になつた不仲へすべもなし
ネーム刺繍にさえも悪筆たたるなり

大阪市　福井野迷路

これでもかこれでもかとてYS11
日の丸に風ありて建国目にしみる

孫を見る

女子大の取り得一向見つからず
好きと好きゴールインとは屁の如し

岡山市　江国幽谷

画き上げた如来がお気毒になり
地蔵さん雨には雨の日の笑顔
まあジュースですのと妓訳をきき
負けているらしいタバコが灰になり

伊丹市　小川静観堂

脱税をうまくやつたら時の人
健保請求確定申告夜の往診
旅人五十年この先きどんな旅
建国を偲んで粉雪に国旗掲ぐ

大阪市　本多柳志

陣笠も小つちやな抱負ありと見せ
浮動票にされてさくらにささやかれ
政見を聞けば何誰も落されず
公約を読めば住みよい国になり

高槻市　傍島静馬

内見で買約月末うろうろし
さむいぼを出して膝上十センチ
本物はパツトのかげにしなびてる
最初のがいちばん良かつた書きなおし

大阪市　山川阿茶

黒い霧お向いさんは紅い霧
予算ない家計簿つけて笑われる

出嫌いが何処へゆく気の服作る
暖房に香水強く匂い出し

ハワイ　築山快夢起

クレヨン画烟りは汽車より太く画き
兎も角も話題の人となつて逝き
サンプルになつた積りで見合いする
フト猫の長い欠伸につりこまれ

高槻市　若柳潮花

手術を控えて
静養の心算であがる手術台
まだ見たい人が居るから手術する
毛槍振る腰がきまらぬ男舞
女舞ばかりに馴れた指を見る

大阪市　石倉旅風

両の手に女こぼれる男舞
読みづらく器用に書いてあるサイン
冬の波はつきりせよと岩を打つ
仲人は親から順に褒めて去に

香川県　三井酔夢

親友の愛児急逝
とり乱す友に無言の涙のむ
花の香に埋め天使のごとき棺

ひとり旅母は訣れの紅を刷き
かたみ分け涙涸れたる肩佗し

豊中市　戸田古方

長者番付にのつているので見直され
説明をすればするほど濁り出し
丁寧にタバコの封を切つて朝
護摩の火に消える欲でもなかりけり

岡山県　浜田久米雄

ぜいたくなことにお米の味を言う
大学へやる気作業着だけは買い
にわとりにせかされている霜の朝
牛肉の値を聞き豚の値もたずね

倉敷市　本田恵二朗

相槌のうまさ目で打ち顎で打ち
極楽へいきとうおます遍路笠
ただ酒の喉に小骨が突き刺り
たつた十七字おぼえて還暦とはなりぬ

高石市　谷沢好祐

だしがらとなつて男は老けて行く
朝星夜星まるで一泊二食付
中年のシームレスには皺が寄り

長男入院

看護婦に叱られている親心

大阪市　水谷竹荘

ひらけてる旦那へ二号たよりなし
名ばかりの恋を指名料で買い
鈴虫の壺のぞきこむ秋が来た
団体へまたかと猿は疲れたり

岡山県　長谷川紫光

お抹茶が片手で飲める家風です
子のみやげ撰る倖せは俺のもの
俺の死を喜こぶやつを数えてみ
おまかせをしました聴診器がぬくい

岡山県　池田古心

順番が狂わにや来そうな死の恐怖
葬儀屋も多忙なりけり寒厳し
東京は知らぬが困ることもなし
咳の出る煙草と知っててむせている

ハワイ　羽佐間柳葉

方便の嘘も電話じや言い易い
敬老日先の短い顔列べ
時計見てまた喫いつける待ち呆け
酔どれが腕振りまわし独言

笠岡市　木山要次

畏くも勿体なくも無信心
狡猾が日増しに孫のおもしろさ
世渡りのうまさドラマから習い
客筋を自慢役所の名を並べ

京都市　松川杜的

修繕寺にて
追い払う死相へ予感が的中し
伊豆観光バスにて
シシ鍋の話も聞いて伊豆の旅
お吉一代記夢の中で聞き
下田にて
観光ブームお吉ゆつくり眠て居れず

大阪市　川口弘生

伊勢路に遊んで
お馬まで檜造りに住むお宮
出たトタン門燈が消えるしまい風呂
患者から医者の商魂教えられ
新発売値頃になるまで待つときめ

倉敷市　井上旭峯

岡大病院入院引続き手術
病院で馬齢加える古稀哀れ
点滴の滴一滴に明日を賭け

運命のいたずら娑婆の風を避け
患者風呂みな切腹の傷のあと
下関市　中村九呂平

持つ人が持てばタオルに色気が出
働く気ないかと六十ゆすってみ
実印を息子にゆずり黒田節
出雲市　尼　緑之助

思いきり化粧成人式へ出る
神苑の雪がうれしい席で飲み
お大事にだけの別れで切れた縁
大阪市　西森花村

雪だるま目はぱっちりと色白で
すらすらと書ける手紙に嘘があり
老夫婦埃も立てず金も無く
鳥取市　河村日満

総選挙もとの木阿弥さんとなり
買収供応はて公約はなかりけり
批判中傷土下座公約はどこへ行た
大阪市　大坂形水

退めるもの退めてすっきりした社内
真っ直ぐな声に一瞬座が白け
心配は持ちこさぬもの静坐する

奈良県　麻生アート

この寒さ屋台のそばも遂に来ず
建付けが良すぎて力余るなり
スケールの大きい話立って飲み
名古屋市　吉田水車

奥様の顔にはすまぬ銀狐
持てるだけ持って人間腹を立て
手袋の片方落ちいて春近し
明石市　家沢薺花

揚げ足の上手な野次へどっと沸き
日向ぼっこ冬にもこんな場所が有る
山小屋にさびしく残る焚火跡
尼崎市　長谷川三司

ひとり身に馴れてサンマの焼き加減
話しの穂折られ灰皿引き寄せる
ハト時計明治の音で今日も鳴る
門真市　福島鉄児

月末と云うに呑気な夫婦客
参考のために見ておく分譲地
地下足袋が来てホステスを戸惑わせ
倉敷市　木村千容

冬されの杉いたましき姿なり

このうえに甘えてならぬ律義あり
一病息災なるほど僕もこれでゆこ

宝塚市　小畠無聖

デパートへ来て蛸焼を買つていに
のれんをば出ればまともに娑婆の風
ひさびさに斜にかぶるソフト帽

大阪市　吾郷玲人

海猫が日本へ春を告げにくる
さく岩機地球の骨を削る音
祝福をされて独身寮を出る

熊本県　有働芳仙

よく出来た方だと金に弱い母
ベトナムが手持ちの株を狂わせる
美容体操終つたらしいお茶を呉れ

藤井寺市　西いわを

寒い日は動くと風が流れて来
健康な人の圧力に敗けまいとする

合併・倒産続々

冷めしの味を秘々噛みしめる

呉市　林野甦光

云い勝つて帰る夜道のボタン雪
無愛想なあんまに肩がほぐされる

生きて行く夜をいつわる顔が出来

島根県　藤井明朗

思慕去来あのひと言をまだ気にし
あの世話この世話貧乏いよいよ抜け切れず
衣食住足りて礼節ほつとかれ

芦屋市　丸川初甫

温泉で泊る話しの初詣
道しるべ石の古さに消えかかり
満員へ晴着の帯が巾をとり

大阪市　西出一栄

雑念を追い出す頭振つて見る
山椒の新芽を待つて摘み取られ
お手伝いの気ままへ唇噛んでおく

姫路市　隠岐不酔

縁談へ親の前だけいやと言い
貧乏神出口分からにやおせちやろか
十円を投げて女難までたのみ

豊中市　寺田花宵

亡母の夢見たと言いたい人を訪う
ふるさとの山が拭かせる汽車の窓
もやもやを通天閣へ置いて降り

神戸市　仲どんたく

ゴルフバツグ武士の嗜みですと持ち
バリユームのまだ残る胃へ生一本
コースターパパが坊やへしがみつき

富田林市　川端東雲楼

ようきかんくせにつんぼから電話
共に妻亡くし老友泣きにくる
手ぐすねをひけば折伏素通りし

大阪市　金井文秋

金もつて来ますと買えぬ値を逃げる
健康税だよと健保を無駄に掛け
気に入つてるくせにわたしに派手かしら

倉敷市　水粉千翁

固意地を張つてる肩が落ちている
細長いくらしを笑い声がもれ
爪磨くおんなに日々の生欠伸

京都市　都倉求女

相変りませず馬鹿馬鹿しいとこで総選挙
結局は親馬鹿になる百貨店

雪の有馬

クラクションに追い廻されている雪見

奈良県　西辻竹青

ひもつきで贈るダイヤじやございません
条件があるのと妓崩れない
妻の愛手先を通り肩に泌む

倉吉市　奥谷弘朗

女房のメモを手にしてマーケット
冬眠の出来る蛙がうらやまれ
こんにやくでまあまあ主義で忘れんぼ

大阪市　児島与呂志

腹だたし値上げの中に酒があり
妻からの電話洗たく入れなさい
俺がここに居るのに妻と娘だけの話

東大阪市　久米奈良子

紫式部邸遺跡廬山寺にて

御黒戸にいまも式部のおわすかと
むざんにも壺こわされし日のうつろ
ひそかなる想い螺鈿（らでん）の光とも

鳥取県　森田布堂

庭下駄の重みもうれし恢復期
山桜ダムの響に散り急ぎ
年金を日割りにしては淋しがり

福井市　大山雅城

虚礼廃止すれば年賀の友が減り
旧友の寂しや賀状戻りくる

軟らかい蒲団に寝ても肩が凝り

大阪市　今西章雅

世直しと言う言葉ありこの一票
女とて容捨はせぬと構えかえ
自動巻はずしたままの日曜日

新居浜市　小林孝正

寝ぐるしい夜は手足が邪魔になり
何んでもないのに妻根掘り葉掘り聞き
値の高い順に金魚が死んでゆき

今治市　越智一水

背をむけて女は愛をたしかめる
半没の地蔵それでも微笑する
藁屋根がうけとめている落椿

京都市　室井八九寸

老眼に漫画愛読して達者
雪の寺鈴虫の群聞く晴れ着
体験が医学無視する食あたり

出雲市　中川晃男

馬車の鈴北極星に冴えて鳴り
大連のサクラへ日本を嗅ぎに来る
太陽いつぱい落盤のない露天掘

奈良市　宮口笛生

明日への英気子の酌妻の酌
おごつたろ来いと少々待ち合せ
酔うて来た不足を云わず床をのべ

岡山県　浜野奇童

「お疲れのところ」と保険屋やつてくる
作文で読めば正しい子の抗議

交通事故

パトカーのライトへ地獄押しだまり

竹原市　杉原愛鳩

針のメド頼めば老眼鏡を出し
スポーツ紙にはさまれてゆく通勤車
早熟な子だつた年上妻にもち

熊本市　楠田英子

気楽すぎての淋しさか女独り
話題とぎれテレビ結構間をつなぎ
テレビドラマ最後まで見たい客の顔

笠岡市　松本忠三

引導をわたす僧侶も伏目がち
マツチ摩る途端ライターつき出され
庭石をスリツパのまま旅の宿

尼崎市　岡本昭三

迷つてる処へ開いた自動ドア

クレヨンで画くスモッグが美しい
新築にようやく馴れた生花の位置

笠岡市　出原真奇

出稼の帰りを友も待つている
妻の目を背にすげのう切る電話
晴着の娘事故であの夜にいこうとわ

兵庫県　河原みのる

貸切りバスにて
クジ引きというあきらめの席安し

建国記念日

モヤモヤと国の肇の日が決り
こつそりと雲にそびゆる歌つてみ

兵庫県　遠山可住

ハワイまで行けるテレビのガムを買い
酔いどれの相手を助役さんがする
寒がりの父凍てついた朝に死に

大阪市　宮地双楽

どさくさが人の心の裏をよみ
長生きが増築せがむ養老院
痴話喧嘩皿で鬱憤はらしとき

宇部市　平田実男

気象台が一番慌わてた春の雪
洋酒飲む時の手つきは別に持ち
一〇〇点の時は云わないうちに見せ

守口市　羽原静歩

ほめるだけほめて画廊の小半日
駅前のランチを食べた倦怠期
世渡りと別に画廊の裏話

美弥市　安平次弘道

お神楽へミコはバレエの形で舞い
嬉しさは指のダイヤに眼を集め
ランドセル家中総出で買いに行き

八代市　永松道雄

大漁の妻が舵とる帰り舟
家政婦に任かせて好きな共稼
病妻の看護淋しさも忘れ

岡山県　藤原秋月

金さえあれば言う事はなし春や春
問題は容易答えは難かしい
翌日配達小さな義理を果しとき

出雲市　原独仙

春を呼ぶ前奏譜なり寒修行
長講の訓示へ水虫痒ゆうなり
墓地の跡何が建つやらブルドーザー

一月十七日母死亡

雪の峯母一握の灰となる
祖父母父眠れる墓へ母も入れ
全身で呼吸する母よ外吹雪

大阪市　室谷鉄舟

僕の運大器晩成と決めておく
好きだから二号でいいワと泣かせに来
腹立ちをもみ手につつみ商に生き

鳥取市　藤本礎山

節分のお化けかと思いきや素顔
母の代からの百人一首しもたまま
集めるだけ集め講元姿消し

守口市　村田瓢太

我が影を慕うて四十二年生く
ふつくらと昔を包んだ綿菓子屋
代々がやせ型なのでとやせている

岸和田市　植山武助

ついてない顔で鼎の生取られ
詩心と別に家族を負う焦り
復職のラッシュアワーもまた楽し

枚方市　宮川珠笑

若く見てあげれば馬鹿ですとひがみ
掃除器の上にほこりがたまって居
お題もくあげても金は降ってこず

岡山県　横山一声

御きげんで帰ればテレビもサノサ節

大阪市　宮尾あいき

愛猫

飼猫の無銭飲食払わされ
女らしくなれと男らしくない夫

泉大津市　高津徹也

金策へ趣味の話が長すぎる
せめて新しき長靴で新雪を踏む
制服も緊張してる答辞の娘

河内長野市　浅川八郎

葭乃師に捧ぐ

路郎師の御声もしますお玉章

ベッドで鉛筆書き（二句）

控室で待つてた六時間ほめられる
膝上三十センチ未開の女のおんすがた

大阪市　不二田一三夫

関西標語作家連盟

気の合うは二二ンが三の友ばかり
親孝行すぎる女婿を歯がゆがり

祭日はお休みしますベトナム戦
加賀市　那谷光郎

賽銭も時世に乗って高くつき
委任状出して二号と温泉に浸り
岡山県　大森娯句楽

鶏が鳴いて出勤まで雑魚寝
全貢税金を食う顔揃い
鳥取県　清水一歩

小説のようには行かぬ僕の恋
元大臣に握手をされるのも選挙
倉敷市　野田素身郎

お仕着せへ女下着で勝負する
親切気だした荷物が重たすぎ
平田市　久家代仕男

立春かそうか炬燵で抜く鼻毛
土産もの値踏みに困るものを選り
下関市　桜川不水

茶がテイに変わり婆アちやま腰が伸び
ゴム沓の主（ぬし）でもめてる子沢山
高槻市　山田季賛

すべり込みで乗る終電の乗心地
耐えて来た枝へ楽しい春が来る
奈良県　木村十悟

御茶の間を笑わせ御無礼落しもの
山も田も売れば富豪の部に属し
大阪市　天正千梢

左前救えぬ母のあせり見せ
野仏が十円硬貨黙と受け
堺市　高崎雄声

おお寒む零下三度を覗き込み
人はさまざま風邪をひくのも皆違い
松江市　岡崎祥月

悪口へ聞く耳はなし耳を閉ず
家族中リレーのように風邪をひき
竹原市　山内静水

指さしていたらひよっこり振り向かれ
ゆっくりと歩こう風が押してくれ
大阪市　中島小石

幸せは愚痴も話せる嫁が居り
酔いたい日もあるさと息子酔うている
小松市　馬場魚山

読まないで捨てる広告折込まれ
お経止んで珠数もて遊ぶ通夜の客
新居浜市　安藤桂仙

訓戒へ貧乏ゆるぎして戻り
働けば働く程に馬鹿にされ
大阪市　中川滋雀

不運にも靴下の穴見付けられ
暖房の車窓に暮れる雪明り
大阪市　西川誓二

親馬鹿がうちは東大と決めており
地下鉄二号線開通
谷町に昭和の電車がまた走り
加賀市　木村一路

医師の手のままに素直な胃の動き
君の眼は人の背にあり別れの日
兵庫県　大江秋月

酒のぐちそうかそうかと聞いてやり
民宿にしてスキー地の予算組む
奈良県　草深酔升

肩の荷を下したつもり票を入れ
共白髪半分ずつで染めてみる
大阪市　河井庸佑

孫の守りしながら息子頼りなく
ことわれぬ義理から話すすめられ
芦屋市　松下たつみ

狭き門親子討入りする思い
良心に背かず金に恵まれず
鳥取県　渡辺乱坊

露天風呂モデルに宿の女中さん
子が出来ぬうちはなるほど新婚さん
東大阪市　本多清人

選挙雑感

その朝もまだ迷うてる浮動票
手を振ってやれば声援ありがとう
新居浜市　近藤凡生

蝸牛主義も主張も知らず生き
腹いせに蹴っては見たが石は石
大阪市　磾弓彦

半分に聞いてもこそばい披露宴
雛壇を三日で仕舞った二DK
江南市　伊丹阿喜良

愚痴云うているのは下つ端ばかりなり
住宅のくじが結婚また伸ばし
松江市　柳楽鶴丸

妻の愚痴みんな知ってはいるけれど
忘れられぬ人思い出すネツクレス
愛媛県　渡辺暁童

均一の顔送り出す美容院

瀬戸内海大橋

空海を貫き赤の鉄走る

大阪市　森本良夫

おどろかす買物バイトで貯めた金
花火まで上げてサービスえびすさん

岸和田市　上林加仙

冬眠の夢突き刺して霜柱
敗戦に清き一票もの言わず

岸和田市　葛城伊三郎

門締めて今重役の顔が寄り
せつかちが立てたプランでせわしない

和歌山市　西尾公作

今日明日の相場次第で大根ひく
肩書に弱い日本を逃げられず

加賀市　細呂木魯木

軍隊の特技で社長になつた友
小さな抵抗記念日へ日の丸出さずおき

和歌山市　二越俊爾

降りそうな空大丈夫と言つて呉れ
足もとに火のつくまでは皆紳士

普通寺市　岡田拳法

休職の私の椅子よどうしてる
戦争がないから山へ死ににに行き

和歌山市　野村太茂津

三味習う妻はますます枯れてゆき
青空を見たくて高野で風邪をひき

泉佐野市　大工睦夫

生甲斐に載せた付けまげ艶が過ぎ
急き物へ管理者ちょっと世辞も云い

和歌山市　土谷城石

箸の持つ下手な癖まで母に似る
宣伝につられスーパへ主婦の列

京都府　清水谷句楽坊

指南車を乗りつぎ乗りつぎ行く仏都
日常の俗事に仏芽枯らしかけ

★

若本多久志

世評無視老の一徹つっぱしり
身に覚えあり眼をとじて黙す
見ぞこないましたと十年添うた妻
朝を出る鏡婚期の遅れ知る
褒められてからの小言がよくこたえ

菊沢小松園

明治百年置いてけぼりにされただけ
一握りの人に引き擦り廻わされる
羽田発つ知らせそのまま沓として
諦めに変り言訳なんぞせず
過まちと気附く背中に眼を感じ

松江梅里

霜柱かえしともない今朝の冷え
あなたと呼んだわ霧の深い夜だった
土筆もう春の息吹きに顔を出し
仰げば尊し歌にならないすすり泣き
羽織着て三月四月はかくせども

清水白柳

生米のなまりで寝言いう若さ
あこがれの対角線にあるひとみ
ウイスキーのせた馬車なり走り去る
税金へ濁る心をぬぐわれず
落目になると梯子からも辷り

川村好郎

信心の尊さ無口な人に知る
清廉を世間知らずにしてしまい
約手約手義歯は歯科においたまま
愛想ようマダムは貸しを忘れてず
ポケットに突込まれたら知らん顔

北川春巣

合格という字を辞書に入れたがり
子がみんな巣立てば教育ママ目立ち
残業の金で値切つて靴を買い
正直も過ぎれば頭ばかり打ち
利子で食う人に健康法を説き

西尾栞

襟巻の狐の顔は従姉妹(いとこ)めき
琥珀色の湯呑の主は生字引
スカンタコという声が大きい仲居部屋
娘のグループへ父の下手なしやれ
生前にきかせてやりたい弔辞です

アンコールしたい句

中島生々庵

◎毎月二千余句の川柳塔の選をしている選者の頭の中に、入選句の中からもう一度反すうしてみたい句—アンコールしたい句が五句六句は必ずある。必ずしも秀句ではない。いいかえると選者が理窟なしに惹かれた句という意味の句である。従って別の欄の秀句鑑賞の対象とか、路郎賞の候補句とかには全く関係なしの句である。そうした句に対し毎月スペースを取って貰って選後感の代りにし、出来れば寸評も加えてみたいと思う。今月はそのはじめとして次の五句を挙げておくことにする。

お仕着せへ女下着で勝負する　素身郎
大漁の妻が舵とる帰り舟　道雄
ついてない顔で鼠の生取られ　珠笑
掃除器の上にほこりがたまって居　一声
にわとりにせかされている霜の朝　久米雄

近詠

麻生葭乃

河村瑞川氏夫人を悼む（二句）

蓮の座も淋しかるらむ淋しかるらむ
幾山河越え給うかや西さして

反騒を日記へ書いて欠席す
飲む夢を見てまで禁酒つづける気
禁酒して時に例外なきにしもあらず
きさらぎ半ばすぎて日記のおくりもの

みんなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチックス
積水化学
本社 大阪市北区宗是町1

川傍柳初篇研究（四十六）

前田喜代人　川端柳風
岡崎重義　故高須唖三味
清博美丸　十府
藤井和雄　岡田甫

460　寝たふりで見りゃ這ふ形りのばからしさ　五扇

岡崎＝「這ふ形り」は夜這いの姿態。当人は緊張しているのだろうが、眠ったふりして客観的に見ると滑稽にちがいない。

清＝賛。川柳には夜這いの句が非常に多く相手が下女であることがほとんど、ばからしい形りを夜這いの句からひろってみると「膝とも談合這ひかけて一思案」（一〇八21）「歩かれるだけは歩いて夜這い来る」（天五宮3）「夜這ひの足どり軽業の綱渡り」（一〇五・23）

藤井＝寝たふりでそっと見ている作者を想像すると、また一そう面白くなる。作者は案外不成功を期待しているのかも知れぬ。人のわるい句。

川端＝眠ったふりをしているのは多分、相模下女であろう。

高須＝寝たふりで見ているのは下女の方ではなく同じ部屋で寝ていた朋輩と見たい、かねてそのことあるを期待していると果たして夜半になると這い出した…であろう。

丸・岡田＝岡崎・高須説賛。

五月廿五日開

461　かァきィつゥばた成る程杜若　眠狐

岡崎＝在原業平が東下りの途、三河国の八つ橋で、杜若の美しく咲いているのを賞で「から衣きつつなれにしつましあればはるゞゝ来ぬる　たびをしぞおもふ」と詠んだ（伊勢物語―九段）。「かきつばた」の五文字を五句の句頭に据えて詠んでいて、のちに、この手法を折句といった。その句頭を、一字一字「かァきィつゥばた」と拾い読んでみると、なるほど「一ト所へ集めて見ればかきつばた」（安六宮2）と感心しているのである。

高須＝「から衣」の和歌を聞いた初学者がその頭の字を拾ってみて「なるほど杜若」と感心した。（二二・33）「杜若気高い在五者が折り」（二四・3）。

丸・岡田＝賛。

462　駒下駄を川へ落してはやされる　長笑

岡崎＝はやされたのは踊り子。駒下駄は素人はあまり履かず、踊り子が常用した。屋根舟の遊興によばれて、舟に乗ろうとしてつい駒下駄を落としたのだろう。若い者などが見物していてはやしたてる。

清＝なぜはやしているかといえば、この踊子はよく転ぶが、舟遊びに来ても、その駒下駄を川へ落とした―やっぱり転ぶ芸者だけのことはある、という意味がふくまれているだろう。

藤井＝転ぶまで考える要はあるまい。何か事あれかしと思っている男連中だ。相手

が踊子ときてははやしたてずばおられまい。

高須＝船遊びに呼ばれた踊り子が、三囲辺で小便に下り急いで舟に戻るとて片方川へ落とした、というのも成り立つ。要は踊り子が駒下駄の片方を川に落とし、船中の連中にヤンヤとはやされたという句。

丸＝船中の連中にはやされたとよりは、やはり礎稿・藤井説をとる。

岡田＝同。はやし立てたのは、橋の上で涼んでいた連中である。

463 **庚申をあくる日聞て嫁こまり　秋紅**

岡崎＝「庚申」は干支の庚申に当たる日。この夜は庚申待ちといい、帝釈天や猿田彦を祭って寝ないで明かした。その夜眠ると人体に住むという三尸の虫がひそかに抜け出し、天に上ってその人の悪業を天帝に告げ、命を短かくすると道教でいわれた。それを防ぐためである。また、その夜は夫婦同衾を禁忌する習いでもあった。「黄素妙論」に「この時は必ず交合すべからず。もし誤ちて交合する時は、天地その寿を奪う」とある。また、この夜同衾して妊娠すると、生まれた子は盗人になるともいわれた。さて、昨夜がその庚申待ちの夜であったと聞かされてもあとの祭り―嫁は心配になって来る。「こらへじやうもなくぬす人をはらむ也」（一三・2）

清＝賛。かなり厳格に守られていた習慣だから、嫁の困りようもひとしおだろう。石川五右ヱ門もこの庚申の夜にできた子ということになっているし、その一番息子も庚申の夜に生まれたということにされている。

高須＝「庚申を嫁の聞くのは耳に立ち（一三・35）「盗人の子も出来ようと姑言（末二・1）

丸・岡田＝賛。

464 **あつそふに灯る向ふにならんでる　万鮑**

岡崎＝吉原の夏の宵の張り見世。張り見世は正面の襖の前に赤い毛氈を敷き、行灯を美々しく並べ、三分の上妓が鎮坐し、左右の壁際には花ゴザが敷かれて、女郎達が順位によってズラリ並んだ。

藤井＝夏の宵の張り見世風景が、俳句のように見せられる。綺麗な句だ。

高須＝「八間の下の張見世暑く見え」でよいところを、こういうのは、当時は被写体をなるべくハッキリ見せぬのがよいと思われていたのか？

丸＝賛。華やかな張見世の情景が眼前にうかぶ。

岡田＝当時の灯火は行灯だけに暗く、吉原の八間と呼ばれる大きな行灯に照らされた張見世は、テレビのライトを当てられた位にまばゆく見えたにちがいない。

465 **あいにくな事片々ハ三会目　五鳥**

岡崎＝「三会目ちっとも座敷あけぬなり」（傍初・40）というように、三会目客には親身のサービスをすることになっている。先方の客はその三会目の馴染客らしく、片々のこちらは名代の若い妓をあてがわれているのも、やむを得ないところか。

清＝無粋に腹をたてるわけにもいかぬ。

高須＝三会目客と初会客の鉢合わせ―初会の方はあわれである―それだけの句。

丸＝私は三会目客と初会客との鉢合わせではなく、馴染客と三会目客と解している。片一方は会いたくてたまらぬ人、片一方は今夜金になる三会目の客。いずれに情を立てようかと迷う一時、「あいにくなこと」は、この心の迷いである。

岡田＝初会には振られても当然なだけに、丸先生の説の通り。なじみ客。

466 **ごう腹さ宵ッぱりするやつを買　亀遊**

岡崎＝買った相方の女郎が、なかなか床に入らず、枕元で長々と手紙を書くようではむかっ腹もたってこよう。

清＝腹を立てたのでは野暮になるが、野暮になっても腹を立てざるを得ない。「枕元わき目もふらず書いてゐる」（傍二・2）「一二寸かき立てゝ又墨をすり」（傍四27）

藤井　いけ好かない客と思われているのを知ってか知らずか。

高須＝これも初回。知らずに買った女郎が、宵っ張り女郎とは業腹であったろう。女郎にも「眠がり女郎」だの「酔っぱらい女郎」だのといろいろの型があったらしい。

丸・岡田＝賛。

〈大陸巷談〉

中国寄席考

東野大八

文化大革命の突発で、私の育ての親中国も大変なおとりこみの最中なので、これまでの〝大陸放浪〟も一服して〝大陸巷談〟と改めることにした。

不二田一三夫兄は、寄席にくわしい御仁とうけたまわっているが、高座の演題が変ると、ちょいとした準備に入る。あれを〝高座返し〟というのだそうだ。ちょうどあれみたいなものと御承知願いたい。

今迄が独りよがりの調子のよさで、若干面映いところが多かったし、柳誌に無縁のよみもの風では、大陸とゆかりのない方々に対して失礼なので、これからはできるだけ柳味漂うものを選んで、愚筆奔放に、一ときの憩いのページといたしたい。

さて、いま寄席という字を書いたので、中国の寄席から幕あけするのも悪くはないであろう。

北京、上海、南京あたりには茶園、茶館というのがある。木製の長しょう木を土間に並べただけのものもあれば、白布をつけた角テーブルの客席のところもある。上海などには、アメリカのギャング映画に出てくるクラブ風なぜいたくなものもある。

北京の茶館は、角テーブルのものが、私たちの気に入っていた。正面にちょっとした舞台、そこに胡弓、蛇皮線ひきがいて、女が出てきて、台のついた丸い小だいこみたいなのを打ってはうたう。客席をボーイが歩いていて、これと思う客に手にした白扇をパラリとひろげ、うたわして頂戴とやる。私にもそれが来たので、〝二姐思夫〟という字面が気に入って、心づけをやったことがある。それをキー、キーうたってくれるのだが、何をいっているのかサッパリ不明。しかし、舞台の美女が、こちらを流し目のちらちらサービスに出るのにはこちらはいい気持のもんであった。

上海では書場というのがあった。ここは読みもの語りものに限られている。中国の読みもの語りものは、地方色に応じて千差万別である。たとえば、北京は楽子、天津が太鼓、揚州鎮江が六書、紹興が平調、蘇州が説書、上海が灘黄といった具合である。

北京新平路で、同じ棟に住んでいた早大出の揚文天さんは、この寄席通なのだが、支那講談は蘇州で大成されたのだそうだ。その原因は、中国語の中で、蘇州語ほどくせのない言葉はないからだそうで、それが成功したのだという。

「説書は宋代の宮中侍講からはじまり巷間にひろまったんですな。評話と弾詞の二種類があって、俗に評話が説書といわれていて、弾詞は唱書という。評話は、日本でいう講談で、弾詞が浪花節に相当しましょうな」とこの人は説明した。

私は浪花節の方を見たい、と注文を出したら快よく一日案内を引きうけてもらった。

弾詞には競馬、競輪みたいに単と複がある。単は弾き語りで琵琶や蛇皮線を用いる。その日盲目のひき語りが出てきたが、平家物語の壇の浦をひく旅の老僧の話を目前にする思いだった。

複の方は、雙といってビワと蛇皮線の掛け合いで、声は低くて、案内人の揚さんにいわせると、〝房事のむつ言〟だそうだ。哀れなつかしきそのささやきに、ビワの音は旋転し、音律はじょうじょう、しかし、一方の蛇皮線は段ばしごを上り下りしているような調子である。

説書は、明末に柳敬亭というのが水滸伝の武松酒屋の段を語ったのがはじまり、清朝に入って黄周士が白蛇伝で極めつけになった。蘇州浪曲？が世にきこえたのは清帝の御前講

演をやったことからだとある。

曲亭馬琴が八犬伝を書いたが、この伝奇ものは水滸伝の二番せんじを地でいったものだ。馬琴のシナ好きは有名だが、そのマネぶりは、水滸伝、三国演義の一節毎に「そもそもこの男は何者でしょうか、あとは次回に」と終り、次章がはじまるやまずのっけに「さても、くだんの男は」という受けっぷりである。馬琴の筆法はまさにそっくり。随って日本の講談調はシナからきた、というのが私の常識である。

「余談はさておき」本文に入るところや「さてもその日のいでたちは」「まずは一部しじゅうをおきき下され」なんていう語調抑揚は、シナもニホンもうり二つである。

浪曲の体裁も弾詞と全くそっくりである。弾詞は開心扁がうたとの節回しにはじまる。讃十字、開場賦が事件のあらましと主要人物の人となりの説明、引というのがそれで、説白となり、感情や形容や叙事がくりかえされ物語は進行する。

支那といわれたころのこの国のこうした講談や浪曲調は、ある偉い地位のある人が貧しい格好で門前にくる。門番が偉張って追い返すが、あとでそれが大変な人物とわかって平ぐものようになって詫びる。この骨法の小人気質が、大変うけて人気があった。日本の水戸黄門など、この焼直しかと思われるほどだ。どこかに私は書いたが、大岡越前守の裁判ぶりも、あちらわたりのネタの再現である。「三侠五義」や「黒法子」などが、そのままのタネ本である。「カマ盗人」「地蔵しばり」「子争い」などはその代表である。

抑揚のある頓知まじりの歌詞のくり返しは、明代の小説本にもよくある型である。

「これ別人ならずして、どこそこの地でその人ありと知られたる」「知らぬといえばそれまでだが、そうと知ったる上からは」とか「父母は三男四女を生まざりしに、われらは姉妹二人だけを生み給い」

一説にこの亜流は、四書五経の韻をふんだ、一種の中国式絶句型態の慣習からきたものだ、といわれている。この絶句の五七調、七五調が日本に渡来して日本の短歌の淵源をなしているとは言語学者の通説だが、俳諧の体質に、私は明らかにこうした中国文詞の血の色が混入していると考えているのだがどうであろうか。

北方は五言絶句、南方は七言絶句が多く、その直釈、意釈の五七五調が、日本語の口説に合致しているということ、とにかく日本の戯作者は、中国漢詞の亜流に道ぎょうした、インテリ層であったことは確かなようだ。

★大陸柳人同窓会

満洲朝鮮中国に居住した、又は縁故のあった川柳作家同窓会。

第三回ご案内。

時　七月二十八日・二十九日

所　明治村・日本ライン下り・日本ライン温泉ホテル一泊。

費　二千六百円見当。宴会・ライン下り等

七月二十八日正午から十七時までに日本ライン温泉に集合。同窓会宴会一泊、翌日朝食後観光。

句　大陸諷詠・明治回顧・各二句宛当日持参。

今回の世話役は現地の東野大八、原仙波（元の紫瞳）の二氏。

夫婦柳人参加歓迎、一室提供。当日は全館借切交渉済。八十人で締切るため参加申込みはお早く。（今回の連絡先・姫路市北条・鉄宿四〇・大井正夫）

宝塚大人形館

宝塚に
空前の娯楽施設誕生！

歌と踊りのハーモニー
世界はひとつ

3億の巨費を投じた画期的な娯楽施設で、館内には世界各地の風景が並び、620体の人形たちが歌い踊ります。その中をボートに乗って見てまわるというスケールの大きな楽しい施設です。
乗船料…大人100円・小人50円

宝塚ファミリーランド

「日車句集」

清水白柳

灯火のゆるるは風の姿なり　という句を「日車句集」九頁（自大正六年—至大正八年）にのせられてあるのを見て、オヤッと思った。それはこの句に古い思い出があるからだった。私が石川県から大阪へ出て来たのは、大正十三年九月一日だが。その月の二十三日の夜、川柳雑誌社主催の柳翁忌句会へ憶面もなく出席したものである。受付に二柳子（現在の緑雨）が居て句会名簿に名前を書いたらすぐ判ってくれて嬉しかった。兼題「年寄」路郎選、同「年回」五葉選、同「薄情」日車選、席題「灯」「花」は互選であった。その席題「灯」の披講のときに聞いたのがこの「**灯火のゆるるは風の姿なり**　日車」であったように思っていて、話をするとき、例にひくときには句会吟であるように言っていたが、句集を見ると、大正六年—大正八年の間の作品として発表されているのである。そうすると句会吟だと思って居たのは間違いで、披講互選のときに誰れかが、灯のゆるるは風の姿なりという日車の句にはかなわないとか何とか言ったのが私の印象に残っていて、その日の句会吟と思い違いして居たものらしい。当日自分は全没だったので余計この句が頭に残ったのであろう。なお思い違いを確めるために生々庵居の本棚から川柳雑誌第一巻の合本を引き出して句会報を調べさせてもらったら矢張りのっていなかった。

話は外れるがその句会当日の出席者の中に半文銭、蚊象、夢路、文久、かほる、笠入、など故人大先輩の名があり、馬行、莢豆（現在の鵜足）、波郎（番傘編集長）など現在でも活躍して居られる方の名を見出すことが出来たのは楽しいことだった。

句集の句の配列には、それぞれその著者が苦心して居られるので、句集によって年代順でないものも多いが、この日車句集は（大正三年—大正五年作）二十六句。（大正六年—大正八年作）二十七句。（大正九年—大正十一年作）三十一句。（大正十二年—昭和二年作）十四句。（昭和三年—昭和六年作）十五句。（昭和七年—昭和三十年作）七句。計百二十句の珠玉の作品がのせられている。その大正六年—八年の句の中にこの「灯の」句があったので、私の思い違いがわかったのだ。

いつ来てもおんなじ着物きてる　恋

これは冒頭の句である。大正三年といえば番傘が創刊した翌年だが、その当時にすでにこうした感覚的な句を詠まれて居られるので少し御紹介したい。

◇

物足らぬままに鏡の前に立ち
慰めか知らず逆立ちする男

信濃路

宵は酒浅間の煙　けさ見たり
うれしくも町の櫓が見ゆるかな

道頓堀

果太鼓いまや鰻を裂かんとす
一反の木綿思案にあまる妻
いつの世の女はさきに起き出でて

以上大正三—五年

晴天に高下駄はいて職もなく
松の内屏風をたたむ風をうけ
灯火のゆるるは風の姿なり
てのひらの窪みにたまる水の量
賽銭も手にあるうちは只の金

以上大正六—八年

てのひらで押える団扇ひくも恋
初秋の抽斗一つ抜いてある
酒肴　つづく障子に飯とある

以上大正九—十一年

結　婚

ここに鍋ありいまだ火に接せず

大正十二年—昭和二年

どっと取り巻く　湯気の立つ飯
椿　うち重なりて咲けば　みだら

昭和三—六年

炭をつぐ女　時に女となりきる
死灰のぬくみ　これが吾子の喉仏

昭和七—三十年

死灰の句が最後にのせられている句であるこうした句集をいつも読んで少しでも前進

するようにしなければいけないとつくづく感じた。

「旅人」路郎先生、「福寿草」葭乃先生、「番傘一万句集」、「私達」不朽洞会員などはものを書くときいつも開く句集であり「ふるさと」豆秋　も句の引例になくてはならない句集として大切にしている。

「私達」

本田恵二朗

年輪とともに私の書架の列に加ってゆく川柳句集、それが二十年以上ともなると相当な冊数となって、中には目も通さぬままのものも交っている。また中には表紙が薄よごれたり、すり切れたのもある。前者はおつきあいで買わされたものであり、後者は折りにふれて頁をめくる愛すべき句集である。その後者の数冊の中で最もよごれっぷりの美事なのを引き抜いて見ると『私達』という背文字の金色がにぶく光っている。

ポケットにすっぽりと入るというタイプのこの句集は私の時折の旅にも同行してくれるのである。この句集と同行するということは百四十五名の川柳作家と同行するということになるから一層に楽しい。

故路郎師は序文の中で『本句集に参加された作家の所在地は全国は勿論遠く海外にまで及んでいる。その句歴に至っては数十年の永きにわたり、既に一家をなしている作家も尠くないので、作家それぞれの個性が遺憾なく発揮されて居り、その点柳界稀に見る絢爛多彩な句集として大いに自負し得るところのものである』と申されている。私自身もこの句集の末席をけがさせて頂いているのでいささか面はゆいが私以外の作家はことごとくベテランばかりなので路郎師のお言葉に間違いはない。その一句一句が路郎師の厳選をパスしたものばかりだから安心して鑑賞出来るばかりか教えられる点がどの頁にもあふれているからうれしい。私は其の日其の時たまたま開いた頁の句とその作家とヘコンニチワと笑みかけることにしている。故人となられた作家もここでは生々とした笑顔で私に話しかけてくれる。故豆秋さんなどはあきず語りあう最も敬愛する先輩である。

速よいかな消えてしまうと火事見舞

豆秋の体臭に圧倒されて全面的降服である。故夜潮老の淡々とした作句振りがなつかしく思い出されてくる。

総入歯膳に置かれて寒うなり

座五に夜潮老の面目を躍如と感じさされる。現役ベテラン好郎梅里兄弟の句についぃ惚れ惚れしてくやしいみたいである。

だし昆布のようなネクタイ今日も締め

好郎の句であるがだし昆布のようなと表現したところ非凡でありユーモラスでありしかもうらさびしさがせまってくる。

かくし芸残念ながら鳩ぽっぽ

梅里の句である。芸達者な彼のことだから勿論モデルを見つけて生れた句であろう。残念ながらとご同情なされるところが彼らしいところだ。私の旧作に

かくし芸モウと一と声鳴いておき

というのがあるが、この辺に梅里と通じあう何かがあるのではないかと思っている。

一年生のように電光ニュース読み

これは私にとって日本一のライバルである十九平の句である。すでに一と昔前の句であるが、今日でも電光ニュースを読むときには必ずこの句が浮んでくるからくやしいことしきりである。川柳雑誌の誌上、そして今日の川柳塔誌の誌上で又大萬川柳でとシーソーゲームを楽しむ如く競い合うこと十年以上、こんな良きライバルがそうザラにあるものではないと思っている。嗚呼打倒十九平未だ成らず。

この愛すべき句集の生れた前後の頃こそ私の川柳意慾最高頂時代であり、川柳探求血みどろ時代でもあった。ご健在だった路郎師が葭乃夫人ご同伴にて小宅にご来駕下さって私に川柳開眼のメスをふるって下さったのも其頃であった。そして又川上三太郎師のご来駕ご一泊の思い出がその後に続くが路郎師は今や亡し、三太郎師は紫綬褒章の栄に輝きご健在である。これがお二人揃っての授賞だった

ら一層にうれしかったと思うのは私だけではなかろう。句集『私達』をなでさすりながらの思い出は尽きない。そして柳界のたゆみなき進展振りに驚き且つ喜ぶ私である。

「親ごころ子心」

傍島静馬

川柳塔編集部から、かねて執筆をたのんでおいた人から原稿が来ないということで、ピンチヒッターとして突然代筆をたのまれた。「私の好きな句集」というテーマで、しかも二日間で脱稿という条件を付けられたのには聊かまいった。

いま私の書架には新旧あわせて相当数の川柳句集があるが、そのいずれもが大なり小なり、捨てがたい味を持っている。

その中で古川柳に関するものは暫く措き、現代川柳の聖典とも云うべき、故麻生路郎先生の「旅人」が一ときわ光彩を放っている。この句集には好きと云うよりむしろ信仰に近い愛着を抱いているが、同感の人も多々あることと思っている。これは別格としてほかに、麻生葭乃先生の「福寿草」、故須崎豆秋氏の「ふるさと」、そのほか諸先輩、柳友が折にふれて、ものされた珠玉の句集にはそれぞれの持ち味が生々と感じられ、いずれ劣らぬ好著と思っているが、これらの中に昭和三十四年五月五日発行、若本多久志氏編纂になる「親ごころ子心」があるのを私は見過すことが出来ない。この著は多久志氏が先年愛児を亡くされた、忘れがたい悩みを川柳に転嫁しようとの試みから「川柳塔」の前身「川柳雑誌」に載った全国柳人諸氏の句の中から、親ごころ子心を詠った秀句を多年にわたって、根気よく拾い蒐められた、他に類を見ない熱のこもった句集である。

頁のはじめに

子を死なし学校に子の多いこと　路郎
こおろぎよ今年は一人たらぬ蚊帳　葭乃

路郎先生はお若いころ長男を亡くされたが、その頃は小学校の横に住んで居られたそうだ

ひょっこりと帰って来そうな夜の膳　多久志
今は亡き児が入学の年となり　山雨楼
ああしてもやれたと思う子を死なし　小松園

等々、愛児追憶の句には哀感交々、犇々と胸を打つものがある。

親ごころの部には最も多く頁を割いてあり、句数も壱千に近いが、これだけ詠いあげれば、もうこれ以上世の中に親心はないのではなかろうかと思うほどである。

子の顔が浮んで旅に玩具買う　光郎
いたずらで困りますよとうれしそう　陽峰
うちの子もやるなと思う参観日　水客
親おろろおろろ受験の日がせまり　生々庵
美しく見せる仕草を娘は覚え　良子
嫁いだ娘の手の荒れ父として眺め　伍健
デモったと知らずほころび母縫い　文蝶
私大でもよいと父親あきらめる　文庫
叱られたままのかたちで寝てしまい　小松園
万引のあわれ子供のものばかり　栞
柳人に悪人なしと云われているが、それかあらぬか、そのこどもらはいずれも善良で孝行者らしい。たとえ句の作者が親達であっても……即ち、子心には

ちちははにめぐりあいたや靴みがく　豆秋
嵩ひくき母の寝姿気にかかり　水車
満員車母の座席がまだ空かず　梧檐
母さまの小言うるさく暖かし　苑女
新築へ父のないのが物足りず　可笑
スキ焼の葱だけ喰べて母は無事　塗杖
黙々として働いた父のしわ　淡舟
両親のないふるさとはぬくもれず　緑雨
孝行になる迷信は逆らわず　梅里

子心約五百句の末尾は

三等でよいとおふくろ困らせる　多久志

という多久志氏の句で終っている。この句集約二千五百句の中から千五百句ほどを選りすぐって出来たそうだが、多久志氏の多年にわたる根気とその努力にはただただ頭が下る思いである。

私は与えられた時間の都合上、ふと目に止まった二十五句だけを抜き書したに過ぎないが、もっと時間をかけて入念に味読すれば、

更に更に秀句を見出すことが出来ると信じている。およそ愛情のない生活ほど佗しく淋しいものはないと思う。私にも親があった。そしていま子を持つ親として、この「親ごころ子心」に接し、もろもろの愛情の中でも親と子の愛のつながりが、如何に根強く深いものかを痛切に感じたことである。

実に近来稀な異色の句集として愛好している。

「三人」

不二田　一三夫

また原稿の寄りがわるかった。例によって埋め立て工事である。申しわけない。

「川柳雑誌」時代から今日まで、かぞえきれないほど句集を拝見しているが、いちばん愛着に似たものを感じるのは、正本水客、黒川紫香、丸尾（若柳）潮花諸氏の「三人」である。

「川雑」時代、雑誌以外の刊行物には、ノー・タッチだったが「三人」にかぎり、校正や進行のお手伝いをした。

三氏の全ぼうを紹介するため「川柳雑誌」で座談会をやり、その記事の〝潮花を語る〟（31・12月号）は葭乃先生がペンをとられたが〝紫香を語る〟（32・4月号）と〝水客を語る〟（32・6月号）は、ぼくの司会、文責となっている。これらの記事が句集「三人」に出ているのである。

この「句集・三人」の発行部数について、故路郎先生とぼくの考えがすこし食い違ったのである。ぼくは強気だったが、先生は大事をふまれ、三氏に負担のかからないように考慮された。結果は句集の印刷が出来上がったとたんに売り切れという好評だった。

「惜しいことをしましたね」と、申しあげたら

「これでいいのだよ、出版というものはこれでいいのだよ」

先生は、もうつぎの、だれかの句集刊行を考えていられたようだった。

とにかく「三人」の評判はよかった。儲かる句集もあるということを、この「三人」でおしえられたような気がした。

三氏がそれぞれ自筆の句とサイン入りの「三人」をぼくにくださった。三氏ともおセジにも達筆とはいえないが、その句はすごい

★

掌をひけば影もあまえている月夜　潮花
戸をあける音さえちがう長女次女　紫香
竹の皮冬の音して踏まれたり　水客

★

三氏は「中津第一小学校」時代からの学友で、すでに定年退職の今日なお柳友として〝川柳塔〟の同人でもある。しかもともに名作家であり、このように小学生時代から友情がつづいている例はすくないのではないか。

この三氏が三月号から何年かぶりで〝川柳塔〟へ顔をならべている。三氏とも温厚な人だが、句へのファイトはすごいものを秘めていて、また、いつの日か、続「三人」句集刊行を計画しているかも知れない。

★

よそにくらべてウチは句集がすくない。どういうものか、句集が出ると「異変」が起こるというジンクスがあって、どうやら〝句集恐怖病〟にかかったようである。

水谷鮎美氏や故須崎豆秋氏の場合もそうだった。路郎先生にしてみれば、「川雑」の代表作家だから〝豪華句集〟というイメージをもっておられたらしいが、著者側は〝地味〟な句集にされた。

故豆秋氏の「ふるさと」は、あれだけの珠玉が光っているのに、すこしも飾らずに、人間豆秋ムキ出しの体裁だった。「これだけの名句がギッシリつまっているのだから、晴れ着をきせておくり出してやりたかったよ」

こんなことをよく路郎先生はいっておられた。わかるような気もする。

生々庵・小石氏の「夫婦」や、好郎・梅里氏の「兄弟」も企画されていたが、いつのまにか立ち消えになった。しかし最近になって「兄弟」刊行のはなしも出ているし、多久志氏の句集も準備中とか、これらを皮切りに、川柳塔社発行という句集が世に出るのも遠くはないであろう。

川柳二〇〇年 (一)

――川柳の起源

戸田古方

昨年の文化の日、柳界の長老川上三太郎先生が紫綬褒章をいただかれました。川柳界最初のことでないかと思います。みなさまとともにお喜び申上げたいと存じます。

昨秋、三太郎先生が読売新聞社から「川柳二〇〇年」という本を出されました。すでに御覧になった方もあるかと思いますが、今日はこの本の紹介を兼ねたお話申したいと思います。川柳二百年というのは誹風柳多留の初版が出たのが一七六五（明和二年）ですので一九六五（昭和四十年）で丁度二〇〇年になると序文にかかれています。

柳多留は川柳の形ではじめて発表された最初の句集であります。昭和四十三年（一九六八）は明治一〇〇年にあたるのだそうですが川柳は丁度その倍の二〇〇年ということになります。

しかし、今から二〇〇年前にできた柳多留初篇が何も川柳のはじまりではないのです。初代川柳が前句付の点者になったのはそれより約十年前の一七五七（宝暦七年）です。そして前句付の江戸に現れたのはさらに一〇〇年前の元禄年間（一六八八～一七三〇）であります。前句付の起源は万治三年（一六五八）に河内和泉に起ったものだといわれています。この前句付こそ、今日の川柳のおこりといえるのです。

この本には次の表が出ています。

- 倭歌
  - 和歌
    - 短歌
    - 発句
      - 俳句
      - 川柳
    - 連歌、俳諧の連歌、連句
      - 前句付
        - 川柳点
        - 冠付沓付
      - 狂句
  - 継歌

継歌とは二人で三十一音字の歌をよむものでありまして、それが連歌となり、俳諧連句となったのであります。前句付はその流れを汲んで上の句（五七五）又は下の句（七七）を題として作句したものであります。十四音字の題には十七音字のつけ句を、十七音字の題には十四音字の付け句をしたものです。つまりは俳諧、連句の練習だったのでしょう。これらのことを三太郎先生はごく手短かに要領よく書いていられます。

柳多留にのっているのは前句付として作られたものですが、前句なしに意味のわかるものを抜いて編んだものなのです。ですから、柳多留から川柳という詩の形が生れたといえるわけです。

尚、川柳の名は初代柄井八右エ門、すなわち柄井川柳の点（選）をしたところの川柳点から、川柳となったもので、一個人の作者の名が一つの文学の名となったものは世界でも珍らしいといわれています。柄井八右エ門、川柳は江戸浅草の町名主、したがって川柳は江戸の産といえるのです。

さて三太郎先生の「川柳二〇〇年」は三部からなり、第一部川柳の年輪、第二部川柳は生きている、第三部はあの日あのころとわかれておりまして、川柳の誕生のことは川柳略史として第二部のはじめに出ています。第一部は昭和篇（戦前、戦中、戦後）、江戸篇、明治篇、大正篇。第二部は川柳略史につづいては時事川柳と女性川柳にふれていられます。第三部は三太郎先生の自伝、吉川英治の川柳、三太郎句集などにまとめられているのです。

とにかく、三太郎先生の眼を通して、江戸期から今日までのが句約二三〇〇句集められています。各時代を分けてありますので、拾

い読みをして時代の作風や空気にふれてみたいと思います。その前に三太郎先生が序文で「川柳とはどういうものか」ということを書いていられますので読ませていただきましょう。路郎先生は川柳とは社会批判、人生批判、人間陶冶の詩だと教えて下さいましたが、三太郎先生はどういっていられるのでしょう。

川柳とは一体どういうものだろうか——、

「川柳は日本の詩歌の中、最も早い速度と普遍性をもって諸君の間を飛散する。表現が単純だから親しみやすく、型が短いから飛び散りやすい。虫でいえばトンボ、鳥ならツバメである。

川柳はまたラジオやテレビの電波と同じである。大きな殿堂にも小さなアパートの部屋にもおそれず、侮らず侵透していく。しかも内容は一日のテレビ、ラジオが多彩であるように多彩である。天にあるもの、地に生くるもの、人の喜怒哀楽のことごとくを内容にしている。しかもなお川柳とはどういうものであろうか。

この質問に対して答えは二つある。一つは直接作品を研究鑑賞して、その実体をつかむこと、もう一つは文章で川柳とは何だということを説明すること。そして後者のほうは簡単に書けば二行か三行ですむ。すなわち、川柳とは十七音を原則とした一行詩で、人間またはその生活を主題とし、ときに必要あれば自然を伴奏させる、これでいい。

しかし、これを縷々と説くことはこれだけでも一冊を要する。したがって、ここでは直接作品を研究鑑賞してその実をつかむ。なんだ、そんな古い平凡なことか—といわれるかもしれないが、真実はいつも古くして平凡なものである。川柳もその埒外ではない。しかも平凡なことだからだれにでもできるのである—。」

三太郎先生は「だれにでもできる」といっていられますが、私、つくづくこの頃川柳はむつかしいものだと思い出しました。私は「川柳はむつかしいものだ」といいたくさえなります。いく度かのスランプの峰を谷を超えてみてしみじみそう思うのです。それは「川柳が平凡」だからだとも思えるのです。

短詩川柳の発見者

吉田　水車

さみだれのつれづれにあそこの隅ここの棚よりふるとしの前句附のすりものをさがし出し机の上に詠む折ふし書肆何某来たりて此儘に反古になさんも本意なしといへるにまかせ一句にて句意のわかり安きを挙て一帖となしぬ云々とあるのは柳樽初篇にある呉陵軒可有居士の筆になる序文であることはとくに知れ渡っている所である。今かりに可有が居なかったら、乃至は書肆何某の意見を容れなかったとしたら、依然前句附は前句附として隆盛を見ていたことと推察される。

こうした意味合から独立の短詩型として今日旺んになった川柳の発見者は可有であると言うても過言ではないだろう、もっと詳しく言うと川柳そのものではなくその母体である前句附の附句のみを編集したものである故やはり広義の川柳の発見者であると考えられる当時の前句附の選者として出色のほまれ高かった柄井川柳翁の名をとって短詩川柳となったことも衆知の通りであるがこの川柳翁が附句のみの独立をどう考えていたかは知る由もない。柳樽初篇の成ったのが川柳翁四十八才の夏とあるからは勿論翁自身もこのことを知っていた筈である、なお可有歿後二年にして川柳翁も亡くなった。

因に井上剣花坊氏の著に「川柳選者としての呉陵軒可有」と言うのがあるが私はその内容を知らないけれ共氏もやはり可有を川柳選者としている点からみて興味深く思うのである。

（川柳戦国志・九）

織田信長（下）

富士野鞍馬

信長の短気

信長は、性来短気でカンシャク持であった怒って寵童森蘭丸に命じ、鉄扇で光秀の眉間を破らせたことは、芝居の「桔梗の旗挙」にも見られるので、

人の手を借りて信長腹をたて　（拾五21）

蘭に打たれたが桔梗の遺恨也　（一二三30一二六10）

光秀は扇のなりに箔をつけ　（二22）

つむりてんてんが十兵衛無念也（三一2）

先刻はなどと蘭丸次で言ひ　（拾五26）

明智が退出蘭丸をじろりねめ　（一三八38）

などと川柳にもなっている。金箔は傷薬である。

こういうことがしばしばあって、遂に光秀の怒りが爆発して、本能寺の変となったのである。

光秀はふだんうぬ見ろうぬ見ろよ　（四6）

ぶたれちゃあきかぬと寄せる本能寺　（一五33）

天正十年（一五八二）五月十五日、徳川家康が安土へ挨拶に来た。その接待役は光秀であったが、御馳走の肴がくさっていたのを信長が発見して、たいへんな怒りようで、早速光秀の接待役を免じ、中国征伐に向っている羽柴秀吉の軍に加わるよう命じたのであった。これが光秀謀反決断のキッカケとなったのである。

御馳走が尽て光秀尻を喰ひ　（七四34）

家康は、二十一日に京都をへて大阪へ向った。

本能寺の変

天正十年（一五八二）五月二十六日、明智光秀は、領国丹波亀山に帰り、翌二十七日に愛宕山に参詣してそこで連歌の会を開いた。時は今天が下知る五月哉　（光秀）

はその時の発句である。そこでもう、信長を討つ決心はできていたといわれ、川柳も、

おそろしい十七文字は愛宕也（二五29）

愛宕からあそこだなアと本能寺　（一一38）

と詠んでいる。

そうして光秀は、中国出征の勢揃いといって、丹波、近江の軍勢一万七百余を召集して六月一日、京都を回って中国へゆくというように思わせて、本能寺を衝いた。

一方信長は、中国征伐の軍を指揮するため五月二十九日京都に入り、油小路六角の本能寺に宿した。長男信忠は妙覚寺を宿とし、同行は、近習五十騎、三百余人であった。

あきらかな知恵に信長たばかられ　（一四23）

十兵衛でよいにお目がね違也　（七21）

此度は主といわせぬ本能寺　（六五7）

得がたきはときと本能寺へしかけ　（一六23）

本能寺寝耳にときの声がする　（一三4一四一4）

土岐のかね寝耳へひびく本能寺　（六四18）

明智勢織田の寝耳へ水浅黄　（八七11）

「とき」は光秀の本姓土岐のもじり。

六月二日の未明、光秀軍は本能寺を包囲して、ときの声をあげて、弓、鉄砲を打って攻め入った。日本外史には、

「信長は臥内に在り、驚き起って曰く「反する者は誰ぞ」と。蘭丸をして出でて其の旗幟を視しむ。反り報じて曰く「惟任光秀なり」と。信長曰く「豎子敢えてしかるか」と。すなわち弓を手にして出でぬ。蘭丸以下の宿直の者皆肉薄して拒ぎ戦う。信長は親ら射て数人を斃せり。弦絶つ。槍を執って闘い右肱を傷つく。すなわち走り入り

姫姿を揮して逃れ去らしめ、火をはなちて自殺せり。年は四十九。光秀は信長の首を索むれども得ず、意に甚だ懼る。斎藤利三其の衣の焦爛せるものを得てこれを示す。光秀なお安んぜず、大いにこれを索めたり。」

と書かれてある。三百人と一万七百人とではどうにもならなかったのである。

ふんどしを帯にして出る本能寺　（安五満2）

駒組をせぬに王手は本能寺　（三九35）

本能寺すてっぺんから王手なり　（草の実初）

本能寺はしの歩をつくひまはなし　（三25拾六）

と、将棋にもたとえられている。その時京都市内では、

なめかたはええが寺ではごくわろし　（安六義5）

丹波のとののむほんだと京さわぎ　（一五19）

本能寺じゃといのと涼み大みだれ　（傍三12）

と川柳も想像している。

信長は午年生れ、光秀は子年生れで、七ツ目にあたり、七ツ目は相性がよいといわれているのに、この始末であるので、それを川柳は、

悪いおん夢七ツ目に巣をくはれ　（安六義3）

丹波の鼠京へ出て馬をくひ　（一九23）

手飼の鼠手をくった本能寺　（一六26）

七ツ目も当てにはならぬ本能寺（二〇9）

本能寺窮鼠却ってとんだこと（傍五39）

十兵衛が馬をのんだは本能寺（四五38）

と詠んでいる。長男信忠も妙覚寺で自刃した二十六才であった。信長は、京都へ上って十五年目であった。惜しいことである。

二男信雄は、家康の援をうけていて寛永七年、七十三才まで長生きしたが、三男信孝は秀吉に反して、天正十一年二十六才で自刃した。

信長は後、太政大臣正一位を贈られ、京都に建勲神社として祀られている。

・近　詠・

須坂市　高峰柳児

正札をたしかめ臍くり腰かがめ
いい月へ残業眠気を消しにたち
とげのある言葉へどん感薄笑い
欠伸うつし合って終電酔がさめ

大洲市　米沢暁明

落日へ水平線が上って来
駅員もともに走った辷り込み
負けたから失投にする解説者

名古屋市　鈴木可香

後輩の道義ストーブの席をあけ
よろめいて見たい気もするおぼろ月
記念切手帖って出すのが惜しくなり
奥さまにされていい気なお買物

今治市　長野文庫

腕づくで取る力なく運を待ち
砂に住みなれて鰈は砂の色
酔って座を乱さず光るご貫禄

和歌山市　秋月宏方

働いて食う手なるほどごつい手だ
ニュータウン間違いもせず巣に戻り
貫禄は無配の社長とは見えず

近作柳樽

西尾　栞選

島根県　堀江正朗

戦盲の辛い試練で生き残り
妻の目が子の目がみんな僕の目だ
頬なでる風に春だとおしえられ
三十年見えてた記憶うすくなり
あきらめた筈の光りへ又もだえ
大丈夫と思う一歩でぶっつかり

大阪市　小谷葉子

身重でもあしたにかかる三味を持ち
すき間風のような御方にふと好意
妻と云うハンデイキャップに渇く恋
閉宴は高砂を聞くなごやかさ

高橋操子さん染織名人展（二句）

虚栄とは別に女の身だしなみ
色彩に酔い孤独をふと忘れ

愛媛県　関本柳剛

コンパクト夜の構図の点となる
敗北の男の背が傾斜する
胸より胸へ通う素朴さ温め合う
御好意へ女は一線引く構え
天職かなあともぐらは地下を掘る

松原市　谷垣史好

日曜だもつと寝てろよ十姉妹
無事平穏なれあいの暮しかな
北風の吹く日放浪に憧れる
心の底から怒つたことのない不幸
膝枕つくづく鼻の穴見上げ

愛知県　槇紫光

お人好し代議士音頭歌わされ
社をやめた人が社のこと聞きたがり
しあわせにしても晩年とは淋し
酒が出るまでアルバムで間をつなぎ

奈良市　村上春巳

いい酒だ鱈子が焼ける音を聞く
落選のダルマ我が身のおきどころ
人間の子へ親鹿の目がやさし
シーズンオフ楽しむ鹿の親子連れ

鳥取県　鈴木村諷子

女房の内助は居留守つこうてくれ
アメリカさんアメリカさん男の方が子を産みそう
足らぬとこあるのでかつぎ上げられる
蟹をもぐ女の指の獣めき

大阪市　古川集一

共稼ぎその上内職までしだし
妻と振るダイスも春の宵のもの
夫待つ夜濯ぎだとは夫知らず
退院をしたらペンから遠ざかり

大洲市　横田放人

飛行塔母は子どもにしがみつき
半坪の庭で結構土まみれ
孫の手にチャンネル権を奪われる
出稼ぎが空から帰る十二月

姫路市　前田芙巳代

女盛り貞女の皮を脱ぎそびれ
雨だれのリズムその夜の独り言
分別があるばつかりに煙むがられ
唾み合い貶し合いして子沢山

高知市　田内文子

逢うための策へ女の身をけずり
雑巾を刺すにミシンを借りられる
今日も又見習う人におはなはん
ホステスのメモ筆跡を見直され

竜野市　森下峰子

生み過ぎて良かつた米寿を取りまかれ
ませ過ぎた子を男として見る恐怖
それからは媚びぬ女にある自信
一目惚れそんな彼氏にまだ逢えず

桜井市　岩本雀踊子

生活につかれた指の節がなる
伝説のように突つ立つ百度石
親馬鹿の慾は子供を信じ切り

新潟県　高野不二

創価学会ボロくそに云いうまが合い
数の子数の子とさわぐ懐古趣味
帽子屋は世が落着いて来たと云う

宇部市　櫛部いさ夢

銀世界などと温泉の窓に佇ち
合格の子には聞かせぬ寄附の額

銀行でいといんぎんに断わられ
島根県　堀　江　芳　子

見えぬのに疑い持たせた悔しきり
お便所の長さ案じるのも夫婦
ざるそばの頼りない程あがり底
大和郡山市　中　内　孚　彦

もう誰も居ぬ野で凧を追つかけよう
夢だつたよそれでもてくてく歩くんだ
その時の空はガラスのようだつたぜ
布施市　坂　東　若　芽

赤ん坊と思えば猫のデート中
選挙演説白水仙が笑つてる
見えすいた男の虚勢面白く
大阪市　和　田　痴　亭

先輩を君づけにして甲斐しよなし
御曹子楽な常務の椅子が待ち
追放の火鉢で金魚越冬し
寝屋川市　福　富　隆　子

年金は庄助さんになれぬ額
そう貯めてぽつくり死んだらどうするの
ストーブを背に勉強は寝てしまい
尼崎市　中　谷　利　美

しめた帯ぽんと叩いて出来上り
みたような顔先方もそうらしい
眼鏡とつても赤ちやんにむかぬ顔
出雲市　王　紫

数学の泰斗実数には疎し
蹴とばした石　水面は丸く受け
満たされぬまま群集に従いて行き
千葉県　鳥　飼　春　泥

独身がいて話せない事があり
這えば立て立てば歩めが反抗し
熱燗で癒る程度の風邪をひき
伊丹市　春　日　青　争

余命たのしく二月十一日の神詣
孫七才阪大が受かるだろうか
日曜亭主妻の鏡へ上眼する
竹原市　三　宅　不　朽

道徳を守つた僕が乗り遅れ
歯車のどの音だろう僕の音
スモツグも春のいろとはかなしいね
竹原市　小　島　蘭　幸

女秘書ビールぐらいは飲めますわ
二人きりになつてラジオをつけました
表情に出すまいとして感づかれ
広島県　高　橋　鬼　焼

紙きれの一字よめない母のメモ
うそのない言葉で朝を妻にわび
印象の一つ一つが過去となり　大阪府　井上美恵子

晩学がくじけそうなる記憶力
風邪引きが治りミカンの皮の山
筆蹟がきれい御見合すると決め　広島市　上代美文

人生のなかばを過ぎて無得点
人間に丸味が出来て退職し
居眠りの猫の耳は動いてい　島根県　小砂白汀

歓声を上げて産れてブローラー
泰山鳴動休日一つふえただけ
純愛は雌に食われて尚愛し　尼崎市　平井露芳

思い切り笑いうつろな気を晴らし
福井野迷路氏御尊顔拝見
東郷さん大きくしたよな人と知り
一人では物騒巡査も伴を連れ　米子市　林瑞枝

いさかいの涙で新婚日誌読む
才媛と云われ子供に恵まれず
エプロンを脱いで乗りだすよい話　米子市　八木千代

あたためて置いた言葉が口に出ず
ロマンスの無いのも親は気にかかり
人妻としてぎりぎりの夢を抱き　羽咋市　三宅ろ亭

校長の顔に明治は生きており
冗談を言えばさばけた人になり
短靴は軽し北国春がきた　高知県　山川勝子

欲しい物あまりに多い初月給
元社長甚平似合うて親しまれ
近頃の玉子酒ではきかぬ風邪　仙台市　川村映輝

思い出して見れば大したことでなし
一呼吸がまんできるようになり
煙り吐かぬ汽車で子供は物足りず　青森県　岩淵一星

恋をしているのがながい更衣室
食ってゆくだけの明日に眼をつむり
電報のような久しい子の手紙　大阪市　小東琴女

もらうだけもらい歳暮の廃止論

実在の人を架空の名で叩き
再会へおなじおもいを打ち明ける
高槻市　山田スミ子

ポスターの名所早くも春になり
猫の方が我が家の暮しへ素直なり
馬鹿になりや馬鹿になつたで疑がわれ
中村市　岡本香芳

元日も変らず注射の針を立て
どうしろと云うのだその眼の白い事
祈る事憶えて瞳に血が通い
八尾市　宮西弥生

良心の住むどん底で今日も生き
空港へ迎えた嫁の碧い眼
鳥取市　近藤秋星

打ち明けて以前に戻る術もなし
東京に降るしあわせな雪もあり
河内長野市　森本黒天子

涙もの好きでないのに涙溜め
急ぐことは無いぞと亀は見せて呉れ
カリホルニア　斎藤流路

流行も愛もスタイル繰返し
四十五の誕生日顔をたしかめる
愛媛県　嶝本満子

或る日ふと義兄へ異性を感じたり
やりくりへもう一度欲しい十二月
大洲市　堀内暁風

舞扇足袋の汚れがよく目立ち
信じてる極楽今日の有難さ
下関市　志賀木石

本場でもフグは庶民のものならず
女中さんにチップはずんで又来る気
ハワイ　上田紅溪

出勤の車を聞いて祖母は寝る
年始状まだまめらしい年を繰り
名古屋市　花東千久良

しあわせになる道なのにわざと除け
個性創造にまたしてもしてやられ
松山市　河本南牛史

素うどんは家主店子は肉うどん
どうしろと言うて泣くのか赤ン坊
島根県　石田清泉

ツンとする数日女いたわられ
算盤が上手でお茶に気がつかず
八幡浜市　山本初子

買う気ある人が商品良くくさし
ちどり足折詰だけはちやんと提げ

姫路市　大久保大夢子
喜寿の足ラッシュアワーを踏んばって
柳友の句は見えずとも川柳塔

八幡浜市　別宮すき
ゴミ箱の上払うにはおしい雪
石段が高いとごりやくありそうな

出雲市　竹内李朋
春の音
群羊の平和へつづく地平線

四十二会
人生はまだこれからと云う乾杯

尼崎市　後岡としみ
叱られる事がふしぎな顔でくる
信頼をされる男でもてもせず

諫早市　前田つとむ
アベックがやけに目につく一人旅
抽せんで正解かるくあしらわれ

岡山県　池田蛙浪
スキーヤーの列に炭負婦が混り
マニキュアの爪けだものの光もつ

鳥取市　小林由多香
試験すむまでのわがまま聞いてやり
喜んでいる子へやりくりなど忘れ

鳥取市　北野秀采
ことりともいわぬアパートに人が居り
張りたての障子にポツカリ子供の目

大阪市　江城功雄
職得る日世相の素肌温くからず
五年振り給料受ける手が震え

岡山県　内海碧人
雪解けてこんな場所かと胸にしみ
叩かれてこれが人生かとひとりごと

出雲市　森山健太郎
近所のてまえ灯りをまだ消さず
視聴率高いから見る気にもなり

北九州市　藤田独楽
自分だけで政治が出来るような弁
合いもせぬ長期予報だが迷い

高知市　永野舞子
連休も金がなくてはつまらない
囲われて人形ケースを派手に置き

堺市　斎藤亜也
鬼は外パパいまだ帰宅せず
紀元節どちらでもよし炬燵に居

羽曳野市　麻野幽玄
弱気にもなるさ斗病二年越し

すねているような微熱がおびやかす
岡山市　行吉照路

一合の酒で返事が鼾かき
小走りの裾が気になるのも女
鳥取市　細谷長平

妻も詠む心となりぬ夜のしじま
心楽しのり合バスの一輪花
鳥取市　河口忠志

サイレンの走り夜更けの冷えに座す
皮バンド締めてかかろう店開き
鳥取市　藤本佳女

末つ娘が茶の間の人気独り占め
ニューモード着てもお里は争えず
鳥取市　藤本鎮也

代表に選ばれているベレー帽
無念無想霰も知らず地蔵尊
鳥取市　藤本征也

十八の胸の隆起に気押される
夫婦愛明治の父に見せられる
七尾市　松高秀峰

一万歩ポストの前で折返し
東京を甘く見て出た娘の嘆き
大阪市　田島英夫

さつそうとしてるあなたにないお金
京の街ぶらり歴史につき当り
竹原市　出島静波

悩み打ち明けて二人は信じ合い
行きずりの山に鳴いてる鳥が好き
竹原市　脇本政己

実印も持たず四十が過ぎており
馬鹿になろう馬鹿になろうと昼の顔
竹原市　時広一路

当にせず話さらりと聞き流し
手紙来ぬ間は無事でいるらしい
善通寺市　伊藤歌子

草むしり名もない花をソーツとし
花壇づくり冬眠の蛙ごめんなさい
北九州市　大沢伊三郎

商用のつど一カ所ずつ古都巡り
若主人いいがめつさ持つて見直され
笠岡市　谷本鈍愚坊

今年こそ決意の日記一カ月
寄席羽織まくらで大紋見せて脱ぎ
大阪市　西本保夫

助手席に乗つたのが運賃払うハメ
子の小遣いに似て有休の無駄づかい

松山市　西川みやこ

場違いの魚が帰つたパパのびく
もひとつの顔を見つけた夜の街

東京都　浅野竜泉

これもそれももつと食べろと里の母
故郷を虫ばんでいる土地ブーム

大田市　藤田軒太楼

祈るのみただ祈るのみ子の受験
知らないとすねた娘が身を寄せる

大阪市　武居寿美司

石段の数をおぼえた宮参り
臨時にとお手伝いして嫁になり

堺市　羽田一扇

お隣の児を抱き上げりや泣き出され
云い出して厄介なもの背負い込み

京都府　菊沢破天

病んでから仏壇の掃除気にかかり
日曜の棚のほこりが陽に目立ち

大阪市　宮本地楽

どさくさを見越し整理の綱を張り
長生きへ肩書がつく叙勲沙汰

島根県　大森孝華

針供養やはり明治の家に生き
気をつけの姿勢で寝てる寝台車

熊本市　北川一進

選挙の顔お国入りの顔つかい分け

大阪市　池田豊平次

花咲けど亡き弟の一周忌

泉佐野市　大工チヨ

机雑然枯れた一輪ざしは詩人

大阪市　西田溥子

金のあるなしで人物評価され

堺市　檀野茂子

政治献金の数字は奇術めき

愛媛県　豊島二九三

皮むけばあわれどん欲愚痴嫉妬

大阪市　谷口信夫

本誌へのご投句はなるべく柳箋をご使用ください。

サイズは本誌と同じです

川柳塔柳箋

一冊　六五円
送料　三五円

秀句鑑賞

前月号から

後藤梅志

コチコチになって社長室から出　（紫香）

どこの会社でも、社長室というものには、ある雰囲気というものがあり、それが社長の人柄と相俟ッテ、いやが上にも課長さん達を緊張させる。その上社長は油を掛けることも忘れないし、冗談も云うが、ムダロは云わせぬようにもちかける。勢い緊張せざるを得ないのである。

コチコチになって出て来た課長さんは、どこかでコッソリ汗でも拭くのであろう。この句は一字足らぬが、解放感がよく出ている。

さしかけた傘は花道行くように　（潮花）

芸というものは、不思議なもので置屋の子は、道を歩きながら踊りをおどっていた。そのように、芸妓でさえ、研究や工夫はふだんから心掛けている。教えられたことだけやっていたのでは、人一倍の上達は覚束ない。

この句の「花道」は役者に視線の集まるところだけに、傘をもつ手の間隔に、より添う型などに、工夫があるものと思われる。いつもながら、作者の芸熱心には、頭が下がる。

その上、句にはふしぎないろ気がある。

追伸の方へぎょうさん書いてあり　（秋月）

句というものはまた、ふしぎなものだ。この句は「ぎょうさん」という語にひかれたようなものだが、一種の魅力を感じた。事実世の中には、くどくどと追伸へ書いた手紙を見かけるが、それを「ぎょうさん」とすると、また感じがかわってくる。その手紙に親しみをおぼえてくるのである。

追伸の方へ重みを持たせるという、手紙の書き方もあることを思わせて、おもしろい。

いい勉強になったと家裁から帰り　（三司）

家裁という所は、人間を赤裸々にし、その場にのぞむ人達を、様々な角度から大胆饒舌にするものらしい。この句を見ても想像がつくのである。同時に、この句は、事件の内容も、関係する人達の立場も、浮きぼりに、読者へ感じさせるにちがいない。

やれやれと、一と役すませた感じである。こんなもち味は、この作者の老巧さを思わせぬ訳にはゆかない。

まっくらな夜へとび出す反抗期　（一水）

そのなにが原因かはしらぬが、反抗期の子供は大人をビックリさせる。甘やかしたせいもあるが、動物的だ。日本古来の五常の道の支張りを取り去って以来大人も動物的だ。近頃の新聞だねはみなこれを報じている。しかし心配する親達の方が、子供にとっては可笑しいであろう。子供には子供の世界がある。

「オレはもう子供ではないんだ。ナンデも出来るじゃないか」従来の高校生が、いつのまにか、中学生にその時期を早めた。此句は何か、いのししの衝動を思わせるではないか。

御祝儀が出そうで三味を締め直し　（代仕男）

すこし古い感じだがおもしろい句だ。

初春のお座敷は、誰れも彼れも調子づいている。御祝儀をハナと云うが、芸子さん達はこのハナがうれしいのである。花代とか、線

香代とか云って、相当な賃金は払ってあるのだが、初春はこのハナという特別手当がつく。但し野暮なお客はハナなしである。

「ああこのお客さんは包んでる」こう見ぬくのは商売人のカンであろう。三味線の音がちがって来るのである。面白い場面だ。

投げてころがして荷主が不在　（宗太郎）

巧みといえば巧み。スキが無いと云えばそれも当る。川柳の妙味はこれで見ると、字数の制約はないもののようだ。

駅の荷物をムゴク扱う状況は、しばしば目撃するが、「取扱注意」も「コワレモノ」も余り効果が無いようだ。なかには、「天地無用」とした気のきいたのもある。ひっくり返しては困ると云う意味だが、なかなかシャレている。これを、アメリカでは、コウモリ傘を描いておくそうだ。これは又頭がいい。

この句「荷主が不在」がまた頭がいい。

身体髪膚ウールマークの羊かな　（静観堂）

今年のひつじ歳をあてこんだ句のようだがじっと見ていると、なかなか面白味の湧いてくる句だ。

身体ハップは、風邪をひかぬことにあたりそうだし、ウールのお召物には、大分お世話になっていて、羊毛は国産ではないが、オセアニアの輸入原毛を加工したもの。ほんとうに「羊かな」である。

この句は「身体ハップ」と「羊かな」を、「ウールマーク」で結んだ手際が凡でない。

小型車に晴着窮屈そうに乗り　（弓　彦）

髪かたちも、服装も、初出社の盛装で、小型車（あるいは自家用か）に窮屈に納っているのは、親戚廻りでもするものか。この頃の人は、調和ということに無頓着である。もし外人が見たらクスクス笑うであろう。

しかしこの句主は、面白くこれを捉えた。

ワンマンカーやもめ暮しという姿　（小松園）

最近、ワンマンカー運転士の身の廻りは、複雑になって来た。ハンドルかボタン一つでビニールガラスの中へ、釣銭も出るし、両替もするし、ドアも閉まる。たださえ踊り場が窮屈なのに、二三人つかえると、すり抜けて這入ることも出来ない。もしすり抜けると、「アンタ」と運転士が注意する。只乗りを警戒するのである。誠に忠実なものだが、その動作を見ていると可笑しくなる。ほんとうに寡婦ぐらしのようだ。川柳家の眼は鋭い。

通天閣死角がそこに待っており　（葉　子）

大阪で新世界の周囲ほど、ヤヤコシイものはあるまい。天王寺の、動物園あり、公園あり、映画館あり、温泉があり、それに飛田新地があって、釜ケ崎のスラム街をひかえているという。庶民のおかしな歓楽境である。

そこには、どんな魔の手がひそんでいるかわからない。それを通天閣の死角に、なぞらえた手腕は、新人と思われぬ慧眼さだ。いま通天閣は、こんな雰イキをしりめに、のっそり浪速の一角にそそり立っている。

下駄の緒に紅をのこして四十すぎ　（す　き）

おんなの、四十過ぎを、どう表現するかは川柳家のむつかしい課題だが、これにすらすら答えてくれたのが、この句ではないだろうか。「下駄のハナ緒のべに」は、仄かな彩どりもあるし、つつましやかな服装と、足どりまで目について、好感がもてる。崩れ去った庶民のたたずまいの中にも、こんな良さが残っていたのかと、嬉しくなった。とりわけ、「紅をのこして」が情緒的。好作家である。

ふところ手選挙カーからおじぎされ　（集　一）

状景ほほえましくなるではないか。

選挙カーは、メガホンを持って走りまわる車の上で、通行人が、どんな顔で迎えて呉れるか、注視を怠らない。若し「ふところ手」の人が居たなら、その眼から、何かを読みとるものだ。大衆の中で、こんな人達が、散票なのである。

大衆の眼はたしかだ。こんどの選挙を見るがいい。アメリカの識者は、日本の常識ある庶民の見識を誉めているではないか。

この句、ふところ手が頗る利いている。

盲目抄

高鷲亜鈍

私という男は、なぜこんなに理屈っぽく、怒りっぽいのかと、われながら自分がいやになってくる。目が不自由になって、思うに委せなくなってからは、余計に肚のたつことだらけで、テレビやラジオで聞くニュースや、娯楽ものでさえ、いちいち文句をつけて、ひとりプリプリ怒っているようでは、いくら信心に凝っても、この性格は一寸治りそうもない。信心は理屈抜きであり、理外の理であることはわかっていながら、教会の先生に食ってかかることもたびたびで「腹立てば心の鏡のくもる事」の信心の心得は、日参しながら吹っ飛んでしまっている。怒りを内にもたねば詩は書けないとは、誰かが云ったように思うが、わたしの詩川柳作品は、とかく理屈っぽく、怒りっぽく、肚立しい。だから詩川柳は文学である、と私はいうのではない。詩川柳作家として「詩川柳考」で引用した名作家須崎豆秋の作品は、軽妙で、呆けていてユーモアがあるからである。そういえば、われらの師路郎の「旅人句集」の中から、ユーモアのある作品の発見することはむずかしいのではないか。路郎師も亦性格的には私同様に、短気で怒りっぽかった。しかし、これがあるために、久良俊、剣花坊以来の新川柳を革新した詩川柳、又は現代川柳の父と、私をして云わしめるゆえんであった。

★

油虫冷蔵庫を苦手とす
触覚のようにステッキ秋をよぶ
虫なれば翅ふるわして泣けるのに
三日目に気拙くなった帰省の子
抱けもせずさわれぬ孫が写ってい
見えぬけどカメラの前で杖撮られ
音もせず蛛蜘が壁から降りてくる
奸声を遠くで聞いた夏まつり
チームから外れ孤独と斗う気
いのちとは別に生きてる葦があり
こころからこころからなる世話が欲し
二十年からの柱時計にネジを巻き
脇道の方へステッキ舵をとり
懐しいものに自転車と太陽と
杖ついたままで冥土に旅立たん
千人のうちに二人とは因果なめぐり
生きているうちから闇に慣れている
向うから声かけられて挨拶す
いのちより三番目はつんぼかおしか

高鷲亜鈍著
詩川柳考
定価 三八〇円
送料 一二〇円
前向き作家を自負する柳人必読の書—残部僅少。申込み所、大阪市東区糸屋町二ノ三四・大坂形水

十日町雪まつり

阿部佐保蘭

東京の大雪あとに雪まつり
（車窓）
リフト待つ行列赤・白・黄色帽
（待たされ暖かすぎて）
乗車賃返して欲しい飯山線
駅前の歓迎アーチ雪の門
いざ行かん我も雪上カーニバル
雪亭の奥は深雪の梅の花
歩きつつつらら喰べてく雪まつり
終戦のモンペ役立つ雪まつり
簪になぞらえつらら髪へさし
金賞の前で又撮る雪まつり
靴に巻く縄所望する雪まつり
十日町小吹となったレセプション
きものショウ人形の如く立つモデル
きものショウ俺が自慢の雪まつり
競い起つモデルも雪のキモノショウ
コーラスも腰の赤さに皆みとれ
雪まつり社長の甥を膝に乗せ
費用皆俺に任せといい社長
十日町小唄となって手を叩き
手を叩く老いも若きもこの小唄
雪まつり塩の相場を慌てさせ
笛の音も夜空に冴ける雪まつり
見物のマフラいつしか頬冠り
火祭りへさっきのビール利きすぎて
警官も必死で起つを又抑え
肪脱が破烈しそうで立上り
すぐ其処じや駄目と彼処へ連れてかれ
燃え上る紋紙供養のフィナーレ
火祭りも焼け落ちいつか雪の肌
駈け登り撮せなかったフィナーレ
おされつつ歩いて戻る雪まつり
又一つ恋が生れし夜の雪
本町の溝へはまった雪まつり
あるだけの蒲団を運ぶ雪まつり
女中部屋迄泊らせる雪まつり
あくる朝手を伸ばしとる屋根の雪
朝酒にゆんべの話まだ続き
はたご屋の看板撮す雪の朝
ヨーヨーを孫へ土産の雪まつり
雪まつりしんこ細工を二つ買い
綿菓子に幼少の頃憶い出し
十日町駅へ手を振る雪まつり

★編集部からお願い

二カ月に一度ぐらい、自分の出した句が出ていないが、全没になったのか、それとも郵便物が不着なのか、というお問い合わせがある。そこで編集部では、何日の着便かを調べるのだが、今までのところは全部二十日すぎなのである。月末発行をするためには十五日締切を厳守していただかないと、選者と編集部では整理がつかないのです。なかには半年分もさきに送稿される人もあるが、なるべくなら六月号発表分は四月十五日ごろにいただけるとありがたい。宣伝ではないが本社の柳筥なら発表月の記入らんもあって整理に大助りなのですが…。

松坂屋 友の会 ■6階クラブ係
カトレヤクラブ
会員募集
お買物資金の積立に
おたのしみがプラス
講習会・観劇・レクレーション
展覧会などにご招待
会費 1カ月(1口)1,000円
お買物票 満期時に会費相当
額をお渡しします
大阪天満橋
松坂屋
942-2201

詠・近・

大阪市　橋本緑雨

バスを待つ間花を幾度も嗅いて見る
何時果てるかなけんめいに働いてる
人たよる事を考えぬ仕事ぶり
思いでをたのしむ事が人生か

売れる川柳考

吉田水車

昨年八月号に同様の表題で服部十九平氏が執筆されている、表題を拝借してわるいが、私は又別な角度からこれについて考えてみたいとおもう。単的に言って川柳は売れないのである。早い話が各所の書画部に行っても川柳の短冊や軸ものを見たことがない、戦前はよくデパートで柳社の肝入りで展示会があって即売もしていたようであるが、戦後は柳社も受入れ側もこんな企画のあることを一度も耳にしたことがない、と言うのはやはり川柳は売れないためであろうか。

勿論作句は売るのが目的でもないし又売らんがためと言う特別な作品もない訳で要は内容書体共完備なものが望ましい、柳誌は集成的報告であり性質上活字になるのはやむを得ないが展示の場合は作家の筆蹟から受ける感覚は作品と相まって人格もしのばれて、眉間にかかげて日夜その人に接し得るし又いやしい言葉であるが川柳PRの潜在的役割も大きい。

俳句、短歌にしろこの種の文芸作品は一個の商品とは違うけれ共受入れ側からすればそれは四分六分と言うところではないか、先ず内容も勿論必要であるが作家の名声も大いにファクターになるし字も亦のらなければなるまい、ひるがえって柳界をみるに習字にも精進することが肝要のように私自身痛感している、ついでに各柳社に於て習字のあつせんをされるよう提唱する次第である。

（四一・八・六記）

きのう きょう

本多柳志

◇ガイドさん、国会議事堂ちゆうのが一向に見えて来んが、どうなってんのかね」「議事堂のあたりは一面の黒い霧がかかっていまして、見えないのでございま―す」これは私がある新聞によせたコントの一節でありますが。この頃の新聞やテレビのニュースを見ていますと、黒い霧は政界といわず財界、芸能界と云わず一面におおいかぶさっているように思われてなりません。

◇「ウラにはうらがあり、底には底がある」のは独り政界だけの事ではない。「君一つ今度の市会議員選挙に出て見ないかね」「馬鹿にするな、俺はそんな嘘つきに見えるかね」こんな誰かのコントを読んだ事があるが、考えれば考える程おかしな世の中である。日本の空一面に拡がっている黒い霧を、あばき立てて騒いでいるとしか見えない、マスコミの世界もまた晴れやらぬ、黒い霧におおわれているように思えてならない。

代議士も一人になれば世を嘆き　柳志

たわごと

川端東雲楼

ずっと前のこと水府先生が堺の福助足袋会社の学芸部顧問として来ておられたとき「あなたは川柳の素質をもっておられるように思いますから精進しなさってはどうです」とすすめて下さったことがありました。

当時先生は三十一才、私は三十才、素質を磨くか磨かぬかで大成するかせぬか、時事新報懸賞に応募水府選、課題、毛皮、に「借金で回らぬ首へ毛皮とは」今では幼稚そのものでも、一等賞、これが処女作で東雲楼のはじまり、爾来三十年間一句も作らぬ空白、おそろしいものです。かたや川柳の巨匠大水府先生惜しみても尚あまりある今は故人、巨木相ついで倒れ我師路郎先生も水府先生の一あしお先きへ。

私はやっと持ちつづけていた川柳の素質、これが現在我が川柳塔主幹生々庵先生のお心にふれ二月号の巻頭をかざらせていただくことが出来て私はうれしい。

何の因果か年こしの一周忌よ

一日くり上げてささやかながら亡妻の一周忌を営みました。川柳塔のここのところを開いて供えました。複雑な気持ちで一ぱいでした。

真実

藤本礎山

私は自由律短詩だけを学んだ。ここ数年来親んできた川柳に、わずかながら一種の疑惑を感ずるようになった。かって何かの本で、獅子門の創始の芭蕉が、

「他の門の詩には色彩があるが、わが詩の門には色がない、しかしその真実と象において色を感じせしめるのがわが門の詩」というようなものを読んだ記憶がある。まことに素晴しい、学ぶべき言葉だと思った。

人生のなかばを軍人で過したので、もちろん文学等という大それたものがわかろうはずはないけれど、最近その文学を知ろうと努力していることも事実である。

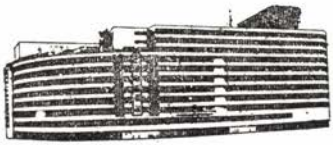
現代川柳のあり方に、悲惨な面、醜悪な面を詠うとき、川柳は必らずこれを排する事実がある。しかしこれらの面も人生の真実である以上、なぜその真実を詠って非とされるのであろうか。

善悪にかかわらず、自己の感動を他人の心にうけ止めてもらうべきリアリズムが、現実に生きんとする詩人の、希みであるとすれば真実なれば非とする面も詠い上げていいのではなかろうか？こういう考えは間違っているのだろうか。

代表的文学、小説はこの面もりっぱにとり上げ、世界を圧するものもあるのである。

私にはその醜悪、苦惨、逆境から、美をつかみ出す文学的才能に欠けてはいるが、ときおり「真実」というものに考えさせられるのである。

最も美しいこと
最も近代的なこと
最もご便利なこと
ハンシンは
皆様の百貨店です



大阪梅田・水曜定休
阪神
電361—1201〈大代表〉

初歩教室

題――「小鳥」

菊沢小松園

小鳥と言う題は、春も近い事だし、身近い題だと思っていたのだが、さて応募された方達からは、例月より作り難くいと言って来られる人が多かった。人間として小鳥を見、小鳥から見た人間、小鳥のこころ、小鳥の動作色々な取材の扱い方がある。要は小鳥という分野に人間の世話を、交錯させたところに句が生れる。

癒え近し小鳥の声も春になり　陽子
訪う小鳥あつて庭木を刈り込まず　千代
鶯をきく恩給のありがたさ　要次
安静の窓へ小鳥の番らし　八郎
水あびる目白あたりへ遠慮せず　ゑつ

第一句、長い療養生活も春とともに終りに近づいた、小鳥の声も春の讃歌だ。第二句、野鳥の来訪を喜んでわざと庭木を刈り込まぬ主人公の人がらも偲ばれていい句になった。第三句、静かな人生を楽んで居るこの人の生活環境も想像出来てほほえましい。第四句療養の窓へ睦しい野鳥のつがい、此の人も早く良くなって家へ帰りたくなったのだろう。第五句、動作を具体的に活写したのがよかったのだろう、小鳥の習性の描きもよい。

朝の床トランジスタから聞く小鳥　寿美司
野も山も俺のものだと上げひばり　白汀
初対面小鳥に首をかしげられ　百酒
小鳥屋の前で迷い子泣きもせず　濁水
沈む気を小鳥の声に励まされ　多幸

第一句、ラジオからの小鳥の声とは面白いしかも寝床で。第二句、野鳥の句は思ったより少なかった、殊に雲雀はなかった、大空を我物顔に喋ずるところを大胆に詠んでおおらかな句になり先ずは佳作とする。第三句、よく小鳥を見て細かく神経の行届いた句。第四句、無邪気な迷い子の一面は捕えては居るが、句境は浅い。第五句、失意を小鳥の声に励まされる、この位いの苦労なら軽いもの。

旅館から小鳥の餌も念を押し　一扇
受験勉強小鳥の餌は母がすり　花子
セキセイのキツス見ている暇があり　初甫
禁猟区へ小鳥の智恵が逃げて行き　秋月
新世帯小鳥に負けぬ日々があり　都

第一句、小鳥が気になって旅先から電話で餌の駄目を押した愛鳥家の心理をよく見てる第二句、受験生を持つ家庭のきびしさが小鳥にまで及んだ。第三句、その暇がもしあっても子供のある人にはそうはゆかぬ。第四句、小鳥も禁猟区を知っていた、生きる智恵がそうさせたのだ、小鳥の身になって出来た句。第五句、小鳥の睦しさにも負けぬ程、新婚さんの喃々の情、若いということは好ましき哉

小鳥放して退院をする療養所　保夫
結局は小鳥の世話も妻になり　利美
首かしげ籠の小鳥が問いかける　軒太楼
見舞客小鳥の餌も持つて来る　すき
芸をするやまがらゆずつて退院し　すき

第一句、退院の記念に療養中の気弄みだつた小鳥を放してやったすがすがしさ、第二句初めから案じてた通りになった、でもいまは小鳥の世話もうれしそう。第三句、小鳥の生態の一面をよく観察している。第四句、この見舞客が病室を明るくしたであろう。第五句長かった病院生活の別れに、同じ病室の人に小鳥をゆずる暖かい人間味が嬉しい。

迷い込む小鳥施設の子が育て　瑞枝
スモツグの並木に小鳥も来ない町　同
一つがい当番で飼う二女三女　千梢
平和とは小鳥が庭へ来るくらし　同
力なき羽ばたき奇術の鳩の虚脱感　静観堂
大木に小鳥小さくちさくとまり　同

第一句、我が身に較べて、迷い鳥を飼う、施設の子の人間味を突いて妙。第二句、スモッグと小鳥、ここにも川柳はある。第三句、

中七に少女らしさがほほえましい。第四句、此の句を遥かにベトナムの人々に見せ度い。第五句、舞台の鳥いい句材を捕えて佳句。第六句、観察の確かさを頂く。

小鳥屋はむんずと摑んで籠に入れ　亜也
籠の鳥見知らぬ顔に首かしげ　同
郊外に住んで小鳥の声が聞け　秀采
熱少し下つて小鳥と話す日々　同
籠の鳥捕われ人というすがた　慶彦
雌もいる筈と鳥籠さげて来る　同

第一句、玄人の扱い方をよく見ている、殊に中七の描写で成功。第二句、この句下五がその習性を遺憾なく捕えてよい句になった。第三句、この小鳥は野鳥余程の郊外でなければ聞えまい。第四句、熱が下って小鳥の声も聞えるようになった、時間の経過も窺える。第五句、籠の鳥を捕われの身と見立たところがよい、これは野鳥を捕えたらしい。第六句上五がよく利いた句、巣引するつもりで飼っているのにと鳥かごを提げて来る、愛鳥家の心理がよく出ている。

大空を忘れ小鳥は籠を出ず　紫同
小鳥籠粗忽のも居て突き当り　破天
春告げるさえずる中を病みつづけ　千夏
父のない子が世話をする小鳥かご　同
世話されて見たい私も小鳥ほど
好き嫌い小鳥遠慮のないしぐさ　同

第一句、飼い慣らされて空の広さを知らず与えられた餌に満足して籠を出る気力もないドスの利いた佳句。第二句、この粗忽者案外世の亭主族かも知れぬ。第三句、春になってもなお療養中、嘔るひばりの声もうとましい。第四句、父の無い淋しさが、この子に小鳥を育てる楽しみを教えた。第五句、女らしさがこの句をほほえましいものにした、但しただそれだけでやや浅い。第六句観察の繊細さがこの句のいのち、小鳥の餌のつつばむ様子を好き嫌いと見たは面白い。

生駒句会

（麻生葭乃居）

ことしの一月、成人の日に明和グループと奈良の住人と、来合わせた満潮さんとで作句しました。柳人が寄れば句会となるのです。

生駒で、ひと月に一度、句会を開き作句しようという葭乃先生のご希望にそうよう、明和グループでは考えているのです。有志のご出席も歓迎されるそうです。

舌を刺す魚と猫も知つている　（薫風）アート

落ちるとこ考えている雪ひとつあり　乎彦
つもる雪みな平等の街となる　胡人
枇杷の花へ愚かな雪となつている　舟遊
俺も四十鰹ほどには見えようか　薫風
魚釣りの好きな男が恋をした　夢虹
とまどいは一本道の続く雪　満潮
まな板の鯉が最後の深呼吸　葭乃
伊勢えびの姿よぎなく飾られる　同
汽車がつく噂根雪のとけぬ村　同
雪に似ぬ白さだよ白は白だが　同

山寺へ団地追われた小鳥たち　句楽坊
小鳥鳴き春はそこまで来た感じ　松風
逃げられた小鳥へ籠が追つ馳ける　正朗
餌に馴れた小鳥はやつと巣に籠り　同
三日坊主それから小鳥母のもの　芳子
早起きは何時までつづく小鳥の餌　同

第一句、住宅問題が小鳥たちにも及んだ、避地にも続々団地が建って、可憐な彼等はやっと山寺の一隅に移住せざるを得なくなった。第二句、小鳥の鳴声に春を感じた、そこまでが僅かに救われたのだが少々浅い。第三句、面白い観察。人々の騒ぎが見えるようだ。具象化した句の面白い例。第四句、小鳥の習性も窺えてよい、この場合のやっとがよく利いた。第五句、上五のずばり、が殊によい、動かぬ語句を得て、句想を引きしめた。第六句、第三者の冷笑を句に生かした、小鳥を飼い初めた、家庭の風景。

長留守を小鳥隣へ預けられ　清泉同
反対の妻も小鳥の餌に慣れ　同

前句の預けられる小鳥達は迷惑ながら、愛鳥家の心理も判って面白い。後句、小鳥を飼うことに反対していた妻のその可愛さに引き込まれて、餌をやることにも慣れてきた、心理描写もよく出ている。

籠の鳥あきらめ切って餌に慣れ　選者吟
山に居た頃へ小鳥の眼をつむり　同

四月二十日締切　六月号発表
題　「雲がくれ」

宛先
大阪市阿倍野区王子町四丁目二番三二号
菊沢小松園

倒産

木村涼人選

倒産は行先告げぬ荷をまとめ　代仕男
倒産を承知で買った株でなし　みやこ
倒産へ禿鷹どもが容赦せず　白汀
倒産を知ってたように言う易者　秋月
先代の暖簾を酒で飲みつぶし　芳仙
呼び捨てにする倒産の債権者　いさ夢
倒産をして愛蔵の贋を知り　明子
倒産が転機となって立志伝　紫
倒産をしても社長のビール腹　百酒
倒産は雲がくれして策をねり　不水
倒産のままでは男生きられず　征也
お人柄ぐらいに倒産構もとれず　古方
倒産へ頼りにならぬ友ばかり　不二
倒産の噂へ労組動き出し　魚山
倒産の噂へ汚職ばれはじめ　初甫
倒産をしてから人間らしくなり　十九平
倒産のおかげ女難を免れる　同
倒産の塀の高さを叩いてみ　可住
倒産をしてからろくでないうわさ　清人
倒産の一夜が明けた貸屋札　晃男
倒産の眼に取り立ての鮮かさ　千代
倒産へ成る様になる腹を決め　鎮也
倒産の社長どこやら行ったきり　雄声
倒産をするまでダニに血を吸われ　どんたく
倒産はしたが時計は動いとり　七面山
倒産を覚悟不渡りばかり出し　光郎
倒産が続きショックが薄くなり　すき
倒産は成程とゆう芸達者　芳子
倒産を知らずにつばめ巣をつくり　たつみ
親会社つぶれ子会社殉死する　どんたく
倒産で奇麗に切れたくされ縁　瑞枝
倒産へ悪友だけが来て援け　佳女
倒産をしてから民主主義になり　一進
倒産に私はどうなるのと二号　素身郎
倒産を救う結婚とも知らず　恵二朗

花

津秋六花選

丹精の庭転勤へ花ざかり　李朋
窓口の花と呼ばれて三十路越え　七面山
何事ぞ花見る中をオートバイ　痴亭
美しい花を目で賞め鼻でほめ　藤波
造花かなし散ることもなく色褪せ　十九平
彼岸花咲いて無縁の墓飾る　佳女
たんぽぽとすみれひばり〈向いて咲き　千翁
放っといた鉢に可愛い花が咲き　千代
花があり詩があり余生満ち足りる　恵二朗
討死をしたよに花の下でのび　古心
路地裏に花束が来る交通禍　春巳
花提げて満員電車の身のこなし　季賛
花言葉忘れ糠味噌臭くなり　舞子
花の宵浮かれる程に儲からず　明朗
温室の花へ暦だけの春　弥生
手の届く桜へ孫の肩車　代仕男
ほめられた寒菊剪られる破目になり　佳女
病む庭に今が見頃の七分咲き　代仕男
嘲笑のように禁酒へ花が咲き　秋月
椿ころころ踏む人もなし寂光院　初甫
ぼんぼりが点り花見は入れ交わり　齊花
お花見に行かれましたか言うも春　初甫
花活けて寡婦のひがみを折りたたみ　酔夢
看護婦の肩借りて立つ花畑　芳子
温床で育ち社長室で咲き　春巳
花散った頃に休みがやっととれ　素身郎
盆栽の棚へすみれは子等のもの　鎮也

花束を捧げる海がきれいすぎ　文子
花何故に失意の僕の方へ散る　素身郎
大安かいなみんな切花もってはる　古方
素通りにさせぬ花屋の季節買う　千翁
さくら未だじっと眠っている吉野　痴亭

佳

花見にも行けず造花の手内職　明子
そろばんが合わぬキャベツの花が咲き　可住
花咲けばアザミも蝶を呼び寄せる　長平
病床へまた心ない花便り　十九平
懸命に咲いて見せても葱坊主　可住

人

妻癒えてまた花のある窓となり　千代

地

花の山遠い酒屋へ二度走り　伊三郎

天

花抱けば尼僧の胸に春がいる　無聖

軸

花の下隣のトラが来て唄い

プラン

友淵貴山選

一年の計雪解けと共に消え　千代
プラン通りに行かず人生面白し　白汀
君と僕のプランを足して結婚す　晃男
道になるプランの土地で五年住み　信二
プランない老の日向は爪を剪り　光郎
月並なプラン若さが承知せず　代仕男
プランにはうつかり母を忘れかけ　木魚
子のプランてるてる坊主だけが知り　勝子
ヒミツヒミツそこでアッと云わるプラン　雅城
持ち寄ったプラン楽しくもめている　恵二朗
よのチャンス生かすプランのコマーシャル　芳仙
きりつめたプランで母の旅終わる　弥生
子はスキーパパはゴルフでママは寝る　春巳
五十過ぎプランは身近かなものばかり　ろ亭
猫に鈴つけるプランと罵しられ　双楽
こうすればこうなるプラン妻若し　可住
この次のプランへ女嘘をまぜ　初甫
町内のプランへ義理がついて行き　藤波
花だより子はいつ行くのいつ行くの　暁明
お花見のプランをたてる雪見酒　正朗
金要らぬプランないかと思案する　忠志
梅を見るプランは楽し瓢磨く　どんたく
子のプランパパに相談してごらん　亜也
新婚のプランマージャン認めない　形水
子のプラン母を離れて友とねる　酔夢
運勢欄にいどむプランに今日があり　千久良
新婚旅行のプランバラ色に映えて　七面山
ハイボールこれからプランある若さ　清人
若き日のプランこぼれるほどに立て　たつみ
庭石を入れるプランへ二年越し　礎山
予定表飲める日ばかり書いてあり　不二

佳

四十才プラン大きくふくらまず　淑子
民宿へプラン疲れの足が伸び　無聖
家計簿の妻のプランに酒がなし　いさ夢
旅行社のプランに「私」が乗って行く　秋月
産むプラン夫唱婦随とはいかず　痴亭
地下足袋がちびてプランが育てられ　千翁

人

大衆は愚なりと甘いプラン立て　十九平

地

齢とって働く筈でないプラン　雄声

天

今にして見れば明治の大理想　水車

川柳手拭い
子沢山
僕のまくらは
何処へいた
（路郎）
送料共　百二十五円

第百九十一回（新年度第二回）

大萬川柳

「代理」

入選発表

選者　清水白柳
投句総数　八百三十二句
入選　八十九句

今治　青女
いいわけを代理電話ですましとき

大阪　誓二
弁護士のキャリアに総てまかしとき

鳥取　村諷子
叱られる代理つとめる日の永さ

大阪　浩一郎
頼りない代理が金を取りに来る

愛媛　暁明
代理からまたの代理を頼まれる

島根　明朗
孫二人代理で来たと母の里

岸和田　操子
選挙後は代理代理を走らせる

守口　瓢太
代理でも出さねばならぬ義理があり

米子　瑞枝
お隣りも代理とわかり気がほぐれ

大阪　柳宏子
名刺交換して代理やと判り

堺　素郎
折詰も代理きっちり届けに来

富田林　八郎
日を稼ぐ手段に代理たてておき

大阪　恒明
プラスアルファー代理同情的になり

大阪　薫風
市長代理自分の書いた祝辞読む

宮崎　夘之助
わたしでもよけりやと代理やってのけ

大阪　幸雄
入れ知恵をされて出直す代理人

熊本　芳仙
長距離で伺いたてて見る代理

姫路　芙巳代
代理ですむに律義がまた出かけ

下関　不水
税務署の方は愚妻にまかしとき

鳥取　礎山
バックミラー車掌の代理相つとめ

宝塚　無聖
代理からSOSのくる電話

大阪　十六里
折詰を睨み代理の祝辞聞く

篠山　与志
目くばせにやおら代理が受話器とる

笠岡　白梅子
ことわりの電話代理が出てとちり

呉　甦光
型破りの祝辞で代理見直され

東京　泰造
慰謝料を中に代理がいがみあい

倉敷　素身郎
代理も来たのでおみやげ二つ要り

大阪　保夫
子を抱いた代理へ渡す勘定日

大阪　明子
気の利いた幹事に代理ほっとする

笠岡　要次
酔わされて代理ほんとのことをいい

西宮　玩柳
考えておくと代理をたてる肚

笠岡　遠二
赤十字社員で保険代理店

大阪　弘生
代理者の名前は口の中で読み

大阪　痴亭
代診のみたて何やらもの足らず

和歌山　木魚
ここまでは代理でやれる判を押し

大阪　没食子
飲むうちに代理で来たを忘れかけ

大阪　春巣
代理やっといて飲みながら首尾を待ち

倉敷　恵二朗

四月の句会

玉造川柳会
時　十日（月）午後六時
題　民謡・バック・医者
所　玉造交差点南百米　大阪信用金庫

南海電鉄川柳会
時　十九日（水）
題　ポイント・厄払い　一週間
所　ナンバ高架下　親和クラブ

南大阪川柳会
須崎豆秋七回忌句会
時　二十日（木）午後六時
題　カニ・直角・相手・つづく
所　アベノ区松崎町　大萬

PTA妻の代理で来たみたい　大阪　阿茶
お料理が勿体ないよな代理来る　南河内　吸江
名刺受け社長の分を上にのせ　大阪　水客
賞状を受ける代理は遺影抱く　大阪　与呂志
いつからか冠婚葬祭用代理　大阪
区役所で顔がきくので代理にし

泉佐野　白光子
休ませてもらう電話へ妻を出し
代理からうける賞状もの足らず
大阪　恭太
代読というまで市長かと思い
かくし芸の代理つとめる部下を連れ
大阪　漣
嘱託で残り葬儀へ社の代理
常連が一つ時店をまかされる
堺　慶之助
轢き逃げの罪をかぶったことがばれ
代理でっさかいと返事ばかしをし
明石　齊花
身代りに川へ飛び込む役がつき
停電のローソクに似た代理
大阪　双楽
代理のアナを黒衣に救けられ
借金のことわりに代理は気に入らず
岡山　一声
髭のある代理の顔をおぼえられ
折詰をもろて代理はすぐかえり
大阪　滋雀
床柱一番遅う来て代理
名義とは違うマダムで持ち直し
富田林　東雲楼
例年の代理本物が来て慌て
祝儀だけ持たせ代理で茶を濁し
堺　一舟
可愛らしい代理で叱言云わず貸し
しよもない議事でも代理メモをとり
大阪　小松園
代読に慣れて社長の癖も取り
代参の自分のことも祈つとき
富田林　美房
委任状ひらひらさせて座り込み
座ってるだけでええねと息子出し
大阪　梅里
さんぱつもして来て代理祝辞読む
名士と名士に挟まれ代理尻が浮き
堺　亜也
退職者らしく保険代理店
妻の座は強しポーラー代理店
代理から報告を訊くゴルフ場
大阪　弓彦
譲歩する線まで代理教えられ
先方の代理のように帰えって来
足しびれさせて代理はこけかかり
大阪　文秋
損になる話は代理ですと逃げ
代理でもよいのに義理のかたい人
賞受ける代理拍手に少してれ
岸和田　きさ子
肝心のことを代理は聞いて来ず
エプロンで来た代理にも訊く意見
一滴も飲まずにかたい代理去に
五客
加賀　一路
妻の旅息を抜けない娘が控え
大阪　寿美司
番僧を代理に雨の日の和尚
大阪　小松園
代理だと判り暫く待たしとき
布施　清人
夫婦でも印鑑証明委任状
高槻　静馬
会葬へ名刺ぎょうさんことづかり
小松　魚山
人
尋卒の社長東大出の代理
出雲　健太郎
地
本人を出せと代理で来た男
大阪　琴女
天
秘書に書かせ代理に読ませクラブ振る
選者吟
会費要る会で代理が払わされ

大萬川柳ベストテン
（二月現在）

一　琴女　五、〇　大阪
二　薫風　五、〇　大阪
三　梅里　四、〇　大阪
四　きさ子　四、〇　岸和田
五　弓彦　四、〇　大阪
六　亜也　四、〇　堺
七　甦光　四、〇　奥
八　利美　四、〇　尼崎
九　小松園　三、五　大阪
一〇　幽谷　三、五　岡山
一一　文秋　三、〇　大阪
一二　清人　三、〇　布施
一三　木魚　三、〇　和歌山
一四　弘生　三、〇　大阪
一五　一声　三、〇　岡山
一六　双楽　三、〇　大阪
一七　瑞枝　三、〇　米子
一八　漣　三、〇　大阪
一九　健太郎　三、〇　出雲
二〇　与志　二、五　篠山
以下　略

昭和四十二年度第四回
兼題「誤算」五句以内
締切　**四月二十五日**
発表　五月二十日

第五回予告
兼題「戸籍」五句以内
締切　五月二十五日
発表　六月二十日
投句先　大阪市阿倍野区松崎町三ノ十
大萬川柳会

☆大萬コーナー☆

三月六日の本社句会の会場で白柳氏が大萬川柳の選をしておられた。いつもなら月末に原稿が編集部へ届くのだが今月は一週間もおくれていたのだ。原稿がおくれると雑誌の発行もおくれるので白柳氏は気が気でなかったのである。
入選、没と句箋がわけられていくのを、そばで見ている人も気が気でなく本社の作句も手につかないといったおもしろであった。それにしても白柳氏は罪な人である。

☆柳界展望☆

写真説明・立つている人左から八歩・新雪・遊星・乱歩・前列白柳・弘朗諸氏　撮影・磯山氏

橘高薫風担当

▼「たった一行平穏無事な日の日記」葭乃先生は最近は益々お元気でいられる。

▼堺川柳会再建川柳会は三月十二日（日）午後一時から八木摩天郎居で開催。古い歴史を持つ川雑堺支部が堺川柳会として改組再発足したわけである。

▼川柳研究社（東京都）では古書柳誌の交換を呼びかけている。同社図書部では近く古書目録を発表する由で、不要の図書、希望の柳書などの連絡が欲しいと。

▼明和川柳研究会（西宮市）の会誌「明和」が一月号から再発行された。発行所西宮市川東町四の二九河相すゝむ。

▼八木摩天郎氏（堺市）は路郎師や安西冬衛氏と机をならべた堺市吏員生活の機関紙「堺市友」へ明治百年にちなみ「昔の堺を語る」座談会に出席、妙国寺事件の真相などを記事にされた

▼ふあうすと編集室が左記へ臨時移転した。神戸市長田区水笠通六の一の一前川千津子方

▼柳都三月号は「二十代、三十代、四十代作家自選句集」を特集。

▼札幌川柳社の第四回柳社賞は横山穂風氏が受賞、「生きてきた自信が生きてゆく力」他五句が対照になった。

▼松江梅里氏（大阪市）は二月十八日第十六回西大寺会陽川柳大会に出席、席題選者をつとめられた。また二月二十六日薫風と大阪市立中央図書館での短詩文学連盟主催の作品展打合せ会に出席。

▼河相すゝむ氏（西宮市）も会陽川柳大会にふあうすと旅と句の会のメンバーと同行出席、岡山の柳人諸氏と交歓された。

▼清水白柳氏（大阪府）は三月五日守口市民会館での川柳三十石二十周年記念大会に出席兼題「塔」の選を担当された。

▼若本多久志氏（西宮市）から「ホノルルにいます。ウイロー社の句会は盛会でした。翌月KOHO放送局から「川柳の話」を三十分放送しました。こちらへ来て、川柳塔の誌友に偉い人が多いのに驚いています。中でも石井氏は太平洋銀行の頭取でした。」

▼大井正夫氏（姫路市）はフッカー美容と健康ニュース「美しく」を編集兼発行されていてご多忙である。さすが柳人編集長だけにその執筆者も鈴木九葉、葵徳三、時実新子という川柳家が多い。（一部二十円）発行所は大阪市住吉区東鷹合町三ノ三九、鳳凰会。なお氏は姫路市北条、鉄宿四〇の一へ転居。

▼若柳潮花氏（高槻市）は白内障手術のため入院されていたが二月二十一日十五日ぶりに退院、視力の調整を待つだけになったとのこと。「眼帯の底に思い出だけが見え」

▼浅川八郎氏は病院から投句され、寝て書くので読みにくいでしょうがよろしくと。

▼福田丁路氏（高槻市）は二月十一日十二日の連休に夫人同伴で日光東照宮に参詣、中禅寺湖畔で一泊された。折からの大雪のため、交通が混乱して難渋されたが、関西では味わえぬすばらしい雪景色、特に雪山と中禅寺湖に感嘆、「東照宮凍てし身に泌むありがたさ」の句信を寄せられた。

▼竹原川柳会では二月二十五日高校生卒業記念句会を開催。四名の卒業生を祝福席題選者もオール学生であったと。

▼丸川初市さん（芦屋市）は二月二十五日、奈良県信貴山上の信貴山観光ホテルへ遊ばれ展望大浴場から大和アルプス連峰の眺望を満喫された。「大和平野は一眺めの窓に立ち」

はげぬ・かぶれぬ白髪染
男まえ理容
環状線寺田町裏駅南一丁

▼奥谷弘朗氏（倉吉市）から、「三月には倉吉公民館で市民文芸講座が開かれ、十六日には川柳講座があります。五月十四日（日）には第二回交通安全山陰川柳大会を開催する予定です」

▼不二田一三夫氏は関西電力発行の機関誌〝ひらけゆく電気〟三月号へ執筆。同誌にはかって故岸本水府氏や北川春巣氏も快筆をふるわれたことがある。

▼行天千代さん（貝塚市）は〝女流作家はいつ作句するか〟を読んで、病夫や年頃の子を抱えてのこの一、二年は作句もしなかったが自分一人が苦しいのではないと悟り、また川柳を作る気になったとのこと。

▼麻生葭乃先生から編集部宛のお便りのなかで、小谷葉子さんの進境をよろこんでいるとおほめをいただいた。

▼清水一保氏（鳥取県）は視察のため三月三日来阪されたが、時間の都合で編集部の一三夫氏と電話だけの対面となった。

▼関西短詩文学連盟主催の第七回短詩文学作品展が三月十四日から十九日まで、大阪市立図書館・三階講堂で開催された。各柳社からも多数出品され盛況だった

▼福永清造氏（平安川柳社）は川柳塔三月六日の本社句会へ出席された。六月四日に開催される「明治百年全国川柳大会」に平安川柳社は社運を賭してといわれるように、スケールも雄大である。同社の十周年記念大会の成功を共に祈りたい。

▼河本南牛史氏（松山市）は三月三日四国霊場弘法大師遺跡を尋ねながら川柳普及の行脚を志し、出発された。

▼伊藤茶仏氏（小松市）は二月九日から十一日まで名鉄犬山ホテルに滞在、中部財界ゼミナーに参加され、帰途、布施市の令孫宅へ立寄られた。

▼岡田拳法氏（善通寺市）は国立香川療養所で加療中だが、この程手術することに決め、「切られの拳法」となるのを待つばかりとのこと。

▼浜野奇童氏（岡山県）は、東京の岩崎書店から「新日本綴方風土記」（子供の作品）の各県版が発行されることになり岡山県版の編集委員になったので締切りの三月末をひかえて大童だとのこと。

▼白壁武弥氏（大阪市）の番地表示が変更した。大阪市北区太融寺町一一二。

▼中島生々庵主幹と橋高薫風は三月十九日川上三太郎紫綬褒章受章並喜寿祝賀会に出席。各地からの出席者で盛会。

酒米と宮水の傑作！
灘の生一本

キンロ
灘／金露酒造醸

本社三月句会

会場　自安寺
六日　午後六時

「平安川柳」の福永清造氏「せんば」の岡橋宣介氏「ふあうすと」の増井不二也氏ほか各社の柳豪や岡山から永宗宗義氏のご出席で盛会だったことを幹事一同深く感謝しております。

水ぬるむ三月、出足すこぶる好調で、関西柳壇の大物がぞくぞくご出席という、近来にない盛会だった。「ふあうすと」の増井不二也氏は披講のはじまるころにお顔を見せてくださったが、熱心に耳をかたむけておられた新しい方が今月も五人ご出席である。力強いことである。

梅里氏の柳話は「作句法」など、氏独得のユーモアたっぷりに満場を魅了しつくす。「わたしの柳話があるから、このように盛会である」仰せごもっともというところ。

三月句会のNO・1は前月につづいて海士天樹氏の秀句にかがやいた。無人の野を行くとはこのことであろう。巨漢、カップ永久保持の第一候補となる。（河井庸佑整理）

席題「ペンキ」　福浦勝晴選

塗立てと書いてあるのにシテやられ　よしを
新装開店ペンキ塗っただけ　水京
塗りたてのペンキで書いた金釘流　梅里
塗るほどに足邪魔になるペンキ屋根　静馬
ペンキ塗る親の子だよと図画を賞め　栄一
ペンキひっくりかえしたような抽象画　瓢太
ペンキ絵のヌードが春の雨にぬれ　茂夫
ペンキ屋の色で苦労をします腕　滋雀
島へ行く船はペンキの臭う部屋　形水
ペンキならうまい字を書く看板屋　静馬
建て売りのペンキの色が気に入らず　与呂志
ペンキ塗り終った処で雨が降り　武助
草色のペンキで春の色にする　眉水
白ペンキ釘の頭へご免やす　宣介
ペンキ屋の筆法知らぬわけでなし　晴造
看板屋変なとこから文字が出来　誓二
塗りたてと書いたペンキに指のあと　文秋
素人はボタボタ落とすペンキ塗り　双楽
長靴についたペンキはほっとかれ　孚彦
ペンキ屋が用意して来た注意札　金三
落着かぬペンキの色も新開地　眉水
ペンキ屋が塗るからペンキ素直なり　美房
ペンキ屋の書いてしまった文字になり　柳志
作業着のペンキへ母の荒れた指　照一
爪の隅にペンキ染みてる月曜日　多蘭子
看板の角はくすぐるように塗り　芙巳代
塗りたてと気がつかぬ程熱い仲　瓢太
新調の服のペンキに秘めた恋　加仙
流行らぬ医者ペンキの匂いだけの窓　生々庵
空室あり塀のペンキもはげたまま　好郎
ペンキ屋のよこれゴッホの絵に似る　生々庵
ご注意のペンキのままで店が開き　吸江
ペンキ塗っただけと言うムード　水京
議事堂のモラルへ挑む白ペンキ　天樹
ペンキ屋の知性と別のベレー帽　勝晴

席題「勉強」　戸田古方選

図書館に学び館長とも馴染　舟遊
勉強部屋憩う一輪チューリップ　一栄
勉強をしてますと言う声をたて　柳宏子
ママ帰るころから机に向い出し　静馬
後継がぬ子の勉強がうらめしく　多蘭子
ごきげんをとって勉強してもらい　花梢
失敗をゆるされ勉強になりました　白柳
勉強はもうせんでええ入社式　多久志
旅に出て社会勉強してもどり　あいき
ライバルの灯だけついてる団地の子　弓彦
勉強せぬことも秀才の見栄にする　生々庵
ガリ勉で東大を出て平社員　多久志
ソロバンを伏せて勉強しときまっ　一栄
勉強に追いつ追われつ母と子と　文秋
勉強をせかせてパパはテレビ見る　清人
何事も勉強ですと逆らわず　水客
勉強をしますと大臣すなおなり　水客
勉強に取組む顔の他人めき　吸江
勉強会もう重役の顔でなし　静歩
ガールフレンドと一緒なら勉強熱を入れ　一三夫
家の為と言う勉強が気に入らず　柳志
いつ勉強してるか知らぬのが入り　滋雀
自己不在そんな勉強の灯をともす　凡九郎

良い勉強したと債権あきらめる　形水
勉強がきらいで家業継いでくれ　弓彦
一生涯勉強やでと古稀の母　千梢
勉強の時間の中の漫画本　清造
勉強勉強学歴の無い父なりき　静波
勉強になりましたわと別れる気　梅里
寝不足になる勉強へほっとけず　白溪子
勉強の出来ぬ息子が親を見る　トメ子
アルバイトして勉強に欲を持ち　白溪子
親と子と勉強の巾くいちがい　千梢
継母の理解が勉強続けさせ　白溪子
勉強へストーブの灯をたしかめる　小路
勉強の構想がまた自慰めいて　古方

席題「古靴」

福永清造選

古靴を買い取る世辞がそらぞらし　いさむ
言い分もあろうに古靴無口也　生々庵
新聞は買います古靴いりません　静歩
捨てるに惜しい古靴じやまになり　千梢
雨の日に古靴出して見て履かず　金三
出しても見しまってもみたり古靴　花梢
大掃除亡夫の靴にある未練　滋雀
大掃除又古靴をしまいこみ　柳志
古靴にしとく今夜の行くところ　形水
古靴が最後に残り散会す　梅里
流行のおくれた靴が僕の靴　孝夫
古靴もネオンをはじき恥とせず　凡九郎
古靴を犬が咥えてきて長閑　多蘭子
古靴を並べて都会めしが喰え　柳志
靴磨き汚ない靴だなと磨き　金三
靴みがき見上げるほどの古い靴　吸江
古靴へご苦労さんと妻の艶　天樹
古靴をまだ履けそうに捨ててあり　宣介
靴のいのちボーナスまで延ばし　文秋
敗北でなかった記憶の古い靴　天樹
古靴と私流れる雲へ寝る　舟遊
古靴の中に亡き子の十二文　清造

兼題「人形」

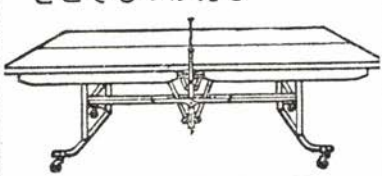
辻白溪子選

人形の産湯へ見習い固くなり　芳子
銘のある人形ケースへ入れたまま　阿茶
人形は飲まないパパのコレクション　阿茶
博多人形コッンと当てたが最後々　金三
初孫へソクリはたいてひな人形　柳宏子
人形がもの言うような舞妓はん　美房
押せば泣く人形泣かぬから忘れ　清造

★

出席—与呂志・白柳・宗義・双楽・一三夫・一栄・古方・水客・瓢太・勝晴・烏荘・弓彦・よしを・水京・梅里・露芳・好郎・滋雀・柳志・照一・多蘭子・白溪子・言也・清造・いさむ・茂夫・柳宏子・吸江・芙巳代・清人・宣介・静馬・知恵・野迷路・栄一・孝夫・貞操・小路・恒明・武助・頂留子・美房・凡九郎・金三・花梢・すみれ・トメ子・宏子・生々庵・静波・季賛・多久志・舟遊・たつみ・静歩・加仙・孚彦・誓二・良夫・文秋・くに生・葛城・形水・一舟・句楽坊・有子・天樹・千梢・幸雄・眉水・あいき・すゝむ・不二也・葉子

ひな祭り大人も交りジャズをかけ　失名
人形も飾り新婚客を待ち　双楽
人形の精巧すぎて無気味なり　芙巳代
成人式だけど人形よう捨てず　孚彦
お人形買うてあげたに泣きなさな　宣介
人形のようにモデルは動かない　昭三
人形を涙でぬらし寝てしまい　吸江
声だけのトッポジージョにある悲哀　天樹
怒っても泣いてもこけし笑いかけ　静歩
黒ん坊の人形やっぱり売れ残り　くに生
わんまん人形になっとく妻の意地　一栄
こけしばかり聚めて青春胸を病み　梅里
人形へ罪をかぶせる知恵もつき　弓彦
人形師理想の顔に創り上げ　一栄
思い出の中にこけしの眼が笑い　静歩
マネキンと同じ柄買う肥えた人　葛城

新機構 Delica
デリカ卓球台
簡単にたためて
手軽るにうごかせ
どこでもつかえる

福井工業株式会社

人形と寝るくせついて一人っ子　水京
人形に魂通う目を入れる　与呂志
ウエスタン弾く娘も雛を飾って見　栄一
人形に本当の愚痴を言うてみる　水客
人形に目隠しさせて箱に詰め　知恵
人形が揺れて運転つつがなし　弓彦
人形にも一役買わせ派手なデモ　よしを
助手席が人形だいた嫁荷着く　吸江
京人形古都の名残を秘めた艶　たつみ
生まれつき人形に似た人間味　いさむ
文楽の至芸を青い眼がたたえ　柳宏子
衝突のテスト受けてるゴム人形　よしを
雛人形女系家族へ受継がれ　幸雄
人形とは言え大胆なポーズなり　瓢太
人形の売場で親子の目がわかれ　くに生
人形の荷造り係が気を遣い　金三
人形は無瑕事故車の窓に揺れ　滋雀
浄瑠璃の良さ人形が泣きくずれ　照一
頬ずりをしても人形目を閉じず　白溪子

兼題「無欲」

金井文秋選

叙勲辞退淡々として世に生きる　多久志
九死一生退院までは欲も消え　好郎
九十もうコロット死にたいなのこと　好郎
和尚はほしがるが本尊は無欲なり　白柳
ひっそりと山村の寺守る尼　清人
無欲すぎて知能程度を疑われ　静波
のち添えの無欲に春がよみがえり　梅里
欲の無いうちは霊感よう当り　好郎
気がかりは薄謝も受けてくれぬ人　静馬
するだけの事して無欲口にせず　千梢
欲の無い顔をしてたら素通りし　多久志
融通が効かぬと無欲左遷され　章雅
バラ展の匂にしばし立つ無欲　花梢
無欲と言う看板で立つ選挙戦　どんたく
求めるを知らず愛の日日たしか　芙巳代
欲なんかないさと気力ない男　すみれ
欲捨てた眉毛は白く長く延び　眉水
無欲てんたん死期を悟ったい寝顔　柳志
天皇は無欲と見える手を振られ　白柳
名人の無欲に贈る叙勲沙汰　梅里
無欲にもほどがあるわと焦れる姉　梅里
昼の風呂無欲な顔に見てくれる　水客
何もかも息子にゆずる共白髪　葛城
御曹子の無欲を社長はがゆがり　どんたく
生きる欲無いと言うてて養生し　阿茶
一日を無欲になってハッピ着る　形水
ぼろ口へ無欲じわじわ脱ぐ仮面　静馬
欲一つ一つの骨を抜く聖書　天樹
ドヤ街のチュウ一杯で欲が無し　誓二
オッパイの他は要らない児の寝息　滋雀
空財布振って無欲の高笑い　宗義
欲の無いこどもにクジを引かす欲　静馬
この齢で欲なぞ無いと油切り　栄一
欲の無い児に迷惑な塾が待ち　小路
欲のない夫はがゆくほれている　清造
天真な心両手で持っただけ　葛城
無欲から見れば詐欺にも隙が見え　文秋

兼題「ハガキ」

小川恒明選

絵葉書でくる消息に幸を知り　白溪子
ハガキ大きくなりハガキ差し間に合わず　瓢太
タイプで来るハガキの内容味気なし　金三
寄せ書のハガキは旗のように書き　一三夫
どこからかずんぐらぼうで来たハガキ　天樹
絵はがきを見たほどでない浜に立ち　清造
クイズ好きの子が居りハガキすぐに減る　瓢太
ハガキからはみ出しそうに孫は書き　芳子
達筆のハガキ配達わかりかね　昭三
年始暑中一年二度のハガキ書き　喜仙
返信のはがきへ一筆春便り　どんたく
転居先不明ハガキ疲れたまま帰り　凡九郎
一枚のはがき郵便受は冬　水客
電話では言えずはがきに尚書けず　宗義
一枚のハガキで済むに義理を欠き　文秋
茶瓶敷きにハガキ折った閑なこと　白柳
ハネムーンまず一報と絵はがきで　双楽
ハガキでもええのに来たともてなされ　静馬

喫茶
グリル・ラウンジ
パーティ・ラウンジ
展示会場
喫茶・グリル・ラウンジ
御門
GYOMON
心斎橋大丸・そごう東入る
TEL 271—6684

一枚の葉書で無事な母と知る　舟遊
おたのみは封書お礼はハガキで来　宏子
ポケツからハガキと珠数と塩袋　梅里
ハガキでもよし故郷の母ほっとする　清人
山からのハガキ絶筆とは哀し　吸江
ハガキだけこまめに出すと送り出し　よしを
女房に当てたハガキも様と書き　鳥荘
税務署のハガキ日付だけ記入　鳥荘
判持って来いとハガキで呼び出され　形水
葉書ひとつ頼りに遠い旅をする　水客
プレゼント夢つかむ気で書くハガキ　与呂志
出欠のハガキぎりぎりまで迷い　形水
几帳面な性格ハガキにもあふれ　柳宏子
まだ生きてはったかとハガキなつかしく　恒明

兼題「血管」

若本多久志選

血管が透ける女の眼が燃えて　どんたく
血管の太さ苦労が泌み出て　喜仙
止血する指へ夫呼ぶ台所　芳子
青筋を立てて顔ではまだ笑い　どんたく
血管がつまって脳がふやけて来　阿茶
他人の血も入れて血管あわてだし　昭三
血管の青さが泌みる病み上り　玩柳
女性には弱い血管ふらふらす　宣介
血管すきとおり注射の針のむこうしま　生々庵
コレステロール政治も都会もいき詰り　滋雀
昂奮に血管ふくれる歳と知り　与呂志
血管を揉みほぐされた湯の香り　梅里
青筋がだんだんふくれた低気圧　柳宏子
血管がパンクしそうな大ショック　花梢
血管は臨終五秒前と知る　恒明
妻揚枝毛細血管いたみつけ　小路
女の手握りかえせば血が動き　茂夫
血管の太さを看護婦だけに好かれ　武助
血管を浮きあがらせて働く手　良夫
プラス三つ流れる血管で夜を稼ぎ　生々庵
血管の老化おどしてコマーシャル　文秋
血管が少しふくれて五十腰　加仙
破裂した血管あの世に持ってかれ　勝晴
憤満をかくす血管波を打ち　静馬
血管をしばりお医者へ飛ばす事故　清人
売る血とは知らず血管血を送る　凡九郎
亢奮を意識している血のたぎり　梅里
飲めばすぐ血管が出る損な顔　吸江
細い手に血管が浮くタイピスト　白柳
血管へファイト溢れる血が通い　白溪子
血管へO型でよい他人の血　眉水
血管へグサリナースの無表情　宗義
血管に盆正月のないさだめ　静歩
血管に滔々一徹の血が流れ　誓二
インターンの針を血管逃げ回り　句楽坊
血管がつまり銀行駈けめぐり　いさむ
こめかみに血管太くもめている　生々庵
政界の血管つまったままで春　一三夫
静脈の浮く手に冬が去りがたく　水客
青筋の具合いで部下はだまり込み　一舟
血管の無い人形の腕がもげ　言也
特賞が当り頭へ血がのぼり　静馬
産声へ俺と同なじ血が通い　滋雀
血管が凍付くような下げ相場　よしを
血管へ夜を働らく注射打ち　白溪子
千年も青筋たてたまま仁王　古方

川柳塔社常任理事会

三月四日六時から常任理事会が本社で開かれた。

栞氏が四十部ふやしてくださるなど倍加運動は着々と進んでいるが、なお一層のご協力をお願いいたします。

投句される側からの要望にこたえ、「近作柳樽」の選者は半年交代となった。したがって五月号の北川春巣氏が5月号から十月号まで受けもたれるわけである。こうして本誌も徐々に充実されていくことは力強い。

出席・白柳、古方、栞、文秋、柳宏子、梅里、好郎、生々庵、小松園、一三夫諸氏。

名地柳壇

▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

交通局句会　児島与呂志報

選びたい道なし交通地獄　緑雨
かすがいの子供をひとりだけ決め　春巣
制服の頃の暮しをなつかしみ　淡舟
五階から葬式が出る団地　鉄児
母親に似たのか子供良くしゃべり　翠芳
ませた子は家庭ごっこで母をやり　茶々坊
見おとりのする子がうちの子とわかり　凡々
まだ入る子供の腹に恐れ入り　雅万
胎動のまだ見ぬ子供に話しかけ　我勝
父ちゃん似などと貧しい父慕い　漫多郎
子供の前と腹の虫押えとき　三十四
無口だから油断出来ぬとも云われ　季賛
大胆な事を無口がしでかせる　孤舟
茶柱に気分なおして出勤し　みのる
茶畑でカスリ姿を撮影し　のぼる
粗茶ですと云われて期待はずれなり　ゴーゴー
茶柱に秘めたファイトが盛り上り　鉄舟
アパートに住んで新婚落ち付かず　和樽
新婚の夢もはかない事故現場　松亭
新婚の窓から見とく熱海の灯　正則
倖せを背一ぱいに発車ベル　六竜子
秋の旅新婚さんが目にはいり　声風
新婚はおかめ小町に見えてくる　松風
新婚の晴着姿に一度惚れし　高秋
ひのえうま過ぎて新婚よく見かけ　等一
新婚のホーム軍歌で見送られ　笑風
旅馴れぬ仕草で新婚宿に着き　継之助
四帖半新婚の荷が邪魔になり　紀水
ばら色の夢新婚にさす陽ざし　胡蝶
遺骨さん渡して刑事さんホットする　与呂志

南大阪川柳会　金井文秋報

目出たい日猫も目出たいめしを喰い　柳志
ペンの暴力ずかずか私生活には入り込み　水客
明日初日まだ振付けの夜が更ける　滋雀
貧乏神根よく落目へしがみつき　一栄
八つ当りなんにも知らん猫も逃げ　梅里
二次会に来て名目を打ち合わせ　静馬
持前の強気落ち目に気付いてず　柳宏子
手が届きそうな仕ぐさに深追いし　一舟
その点は何とも言えぬ私生活　静歩
その仕ぐさ満座の視線束にする　笑痴
お隣りは倖一ぱい新婚さん　痴亭
愛情が落ち目になってから戻り　文秋
母だけに解るしぐさで無心する　弥生
曲り角名目だけのスミを切り　白柳
栄転は名目だけの都おち　双楽
私生活もふれ商談まとめ上げ　千梢
する事なす事先妻によう似て来　十悟
三味線にするぞと猫を追い散らし　清人
新妻のしぐさ楽しい事ばかり　明朗
あのときのしぐさに思い当るふし　恭太
じやれ猫へどこまで解ける毛糸玉　金三
端役のしぐさも劇評見ていたり　恒明
プライバシー守る襖に釘を打ち　芙巳代
やる事がみなスカタンとなる落ち目　瓢太
ひがみっぽくなって落目の父老ける　集一
座る立つ所作に心の影ゆれる　凡九郎
名目はどうであろうと袖の下　弓彦
借りた金からだで返す羽目になり　八郎
花道の後姿にある落ち目　形水
良妻をだます名目でっち上げ　季賛
一本の扇子のしぐさ興を添え　玩柳
口もまわらぬ子に仕ぐさおぼえられ　千万子
面影もしぐさも初代偲ばせる　琴女
鏡台の仕ぐさも母に生き写し　白光子
ぎこちない仕ぐさに見える左きき　章雅
唯一人妻が味方と云う落ち目　あいき
よそよそしくても他人でないしぐさ　喜仙

玉造川柳会（大阪市）西出一栄報

聞き耳をたてて仲人の声へ立ち　凡九郎
バケツとは知らず浅利は口を開け　静馬
双葉から末恐ろしい恋の唄　美房
節分に春のとびらはまだ開かず　文秋
節分の鰯しまつでない値段　太路
集金の留守階段へ声をかけ　千葉
シーズンへ階段疲れと云う仲居　六竜子
ペン皿に埃積って社は潰れ　幸雄
捨て売りの皿いびつでも事足りる　喜久堂
出し店で半端のお皿買うてくる　金三
皿の水日照り気になる河童の子　井平
灰皿の山へ労資の朝が明け　静歩
一切れの寿司が満座に残る皿　眉水
指図した上役が見当らず　季賛
指図して後は委せて旅に立ち　貞山
いつまでも指図をしてて欲しい父　一舟
とり込みの世話役をする苦労人　すみじ
監督がくると指図もなく動き　白柳
指図する方がよっぽど気が疲れ　一栄
沈着なガイドの指示に助けられ　梅里
花見宿臨時を出せといきり立つ　半月

備前川柳社　吉永文化川柳大会

日時　四月二十三日（日）十二時から

投句　四月二十日着便（岡山県和気郡吉永町福満備前川柳社あて）

臨時ニュースドラマの帯になって出る　中性尼
私鉄スト背広で切符切ってくれ　柳志
臨時休講ウワーと歓声上げている　章雅
皇子誕生臨時ニュースも晴やかに　あいき
臨時工ただハラハラとさせるだけ　照一
臨休でひとまず債鬼の鉾をさけ　滋雀
不届きを臨時のせいにして詫びる　柳宏子
シーズンへ臨時の坐女も雇うとき　清人
元旦は河童も皿の水を替え　野菜

川柳世面多留（小野田市）

倖せがいっぱい今年はいそがしい　しげる
自分にも読めない文字がある日記　純昌
三カ日日記も三日ためて書く　涼水
家計簿に追われ日記は遠くなり　和男
三カ日までは日記も酔うて居り　九呂平
日記　やく乙女別れの煙泌む　恵美子
ひとり子の育児日記も七冊目　素道
遠慮なく来てあぐら組む彼が好き　いさ夢
政権のあぐらゆさぶる黒い霧　種一
関取の土俵見上げる大あぐら　呑海
湯上りのあぐらに燗がついてくる　素空
菓子箱があぐらの前でかしこまり　花仙
押売りへスゴミの胡座かいて見せ　幸子
座布団の無い車座で意気が合い　半休
遠慮して居る座布団に猫すわり　羊歳
気安さが座布団にも有る友の家　新雪
初出勤お屠蘇機嫌も覚めやらず　千枝子
鏡餅喰べて出初めの服を着る　酔生
仲人の位置にも仲人思案する　明

岸和田川柳会　高橋操子報

円満な家庭のびのび子が育ち　白光子
円満に話がついたお茶の味　春栄
四五日は消息を絶つガードマン　きさ子
罠でよし落ちてもみたいいい器量　好郎
赤坂のこんなところにあった罠　勝晴
桐一葉秋の日射しへすねて落ち　かつらぎ
発つ人を送る陽ざしの温かし　たけし
うっかりと手を出しバラにひっかかれ　梅里
おしゃべりが来て内職の手が停まり　三志郎
するだけの事はしてます手内職　加仙
内職のほこり落せば子が帰り　操子

南海電鉄川柳会（大阪市）　圭水報

誤乗したらしい見なれぬ景色なり　和郎
十二月誤乗したのをくやしがり　宏子
発車ベルホームの間違い気がつかず　八郎
教えてもくれず誤乗へそっけなし　貴山
誤乗でも新幹線は名古屋まで　圭水
飛び乗れば車庫に納まる車らし　句念坊
誤乗して葬式済んだ後へ着き　金三

富柳会（富田林市）　阿部柳太報

入れかえの出来ぬ根情で年不惑　はじめ
根性で義理を果たして女老け　美代
セールスの根性マアマアと置く名刺　六竜子
根性へ足腰ついて来ぬも年　東雲楼
気安めを云うなと落選腹を立て　柳太
気安めに二泊三日の湯に誘い　梅里
気安めのうそにも言えぬ聴診器　摩天郎
良い政治私の選んだ人が生み　努
松葉杖ついて一票入れに来る　紅月
売出しにパパのも一つ義理で買い　美房
すっぽ抜き恨まれて売る週刊誌　吉太郎
恨むなら政府うらめと税吏言い　凡太
恨まれはせぬかと意識する美貌　栄一郎
世を恨み人を恨んで狭く生き　吸江
恨みますよと云うて別れてそれっきり　花梢
恨みなく碁はタイタイにして別れ　修

ウイロー社句会（ハワイ）　快夢起報

珍客というもてなしに肩がこり　柳葉
過去は過去十年ぶりを酌み交し　浅太
初孫という珍客で里帰り　泉水
珍客の花嫁立ったり座ったり　快夢起
珍客を迎えて迷う台所　紅茶
珍客が帰った後の寝正月　紅溪
珍客をもてなす術もなき不遇　ユス子
何年になるかと握手交わす笑み　蒼蛇
珍客の隅におけない隠し芸　暁舟
珍客へみせる笑顔はお世辞なり　内海
珍客に聞く旅の話の面白さ　仙亮
珍客が食傷気味につづいて来　力口女
突然の珍客妻を慌てさせ　あき坊

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般

合資会社　西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (761) 三四五二 — 四
夜間 (762) 四四〇八

珍客は個性まる出し酒の量　不明子
鴨が葱背負って珍客訪ねて来　万里歩
珍客も一役買った農繁期　拝山
珍客到来酒は上々おらが春　魔花麗
挨拶はぬきで一風呂浴びさせる　三石

大阪逓信病院川柳会　森下愛論報

花束を忘れて新婚汽車を降り　夏生
ドサ廻りでも花束があり化粧部屋　没食子
関係をほのめかしてゆすりに来　愛論
相談屋男女関係多い事　竹志
天下り人事のうらにある秘密　草右
新婚列車花束隅に捨てられる　幸男
関係は夫婦以上とのろけられ　竹荘

オーエスケー川柳会　大坂形水報

入社日の社の食堂がなじめない　雄元
先輩よりも歌が上手な若さ持つ　博泉
手仕事の横にラジオの歌があり　重広
どん底を忘れる歌の輪で叫び　亜成
宴会の歌は付きさいのお手拍子　順造
労働歌わが青春をかきたてる　洋児
給料日やっと一息友の顔　大山
友来り故郷の話に夜を明かし　幸太郎
合格だ友と抱き合う受験生　美露
本当の友の心があらわれる　健坊
友情をうたい文句に金を借せ　勝美
友情の或る日親より役に立ち　東勝
友人に紹介をする良い話し　一扇
鼻垂れの友素晴しき友となる　孝夫
友情はずばりと痛いとこを突き　有一
取って置き先にうたれ困りだし　仙夢
友情も不渡りまでは止められず　常夢
まあ一杯もう一杯で唄になり　智也
応待の電話で知れる新社員　神田

出世した友訪ねない意地をもつ　形水
旧友の両手つかんで涙ぐむ　白柳

あすなろ川柳会　松江梅里報

天地から見れば争う蟻ぞ人　好郎
アルバイト天地無用が通じない　福郎
どさくさへご無沙汰組も到着し　恵美子
天からも地からも雪が舞う如し　ゆきを
ちと足りぬ同士似合いの式を挙げ　百酒
飲み放題みたいにバーは酌いでくれ　慶之助
お詣りもせず年男だけ見てかえり　弓彦
妖精がまだ生きている子の天地　素郎
どさくさの中で実意をみとめられ　梅里

和歌山短詩型文学クラブ　中筋三幸報

職安の列は日溜り選って立ち　康郎
掃除機のように電車は列を吸い　和三郎
滑るより行列ばかりで疲れて来　五月
吊り皮に軽い生命をゆさぶられ　公作
肩掛の狐に狐足をかけ　智恵女
その人が一座の中の潤滑油　葵水
油屋の集金油を売って居り　三幸
楽隊の行列後ろ乱れがち　光治
不況しらず蟻の行列ストはせず　善八
みかんの皮包んで捨てる慎ましさ　城石
油吸う化け猫舌の長いこと　文太郎
魚まで油の臭いする時代　勲
行列の秩序を乱す信号燈　俊爾
大都会デモ行列に横を向き　利晴
パンの耳油をすって生き返る　貴子

どんぐり川柳会（羽曳野市）川村好郎報

年の暮見舞の妻も立ったまま　英太郎
恵まれぬ施設へ愛の餅を搗く　鬼遊
つつがなく生きてテレビの除夜の鐘　輝戊

椙元紋太先生喜寿記念

第12回　ふあうすと全国川柳作家合同句集・参加作品公募

4月30日締切・発表6月記念特集号

公募要項は前号に発表。
本年は椙元紋太先生喜寿記念として一千人一万句集を念願している。ふるってご参加のほどを。

餅さえもモーターで搗く味気なさ　茶坊
手術近し暮正月もあるものか　士朗
あさはかな見栄数の子も用意して　幽玄
年の暮関西弁もあらくなり　与一
夢のような儲る話にひっかかり　重夫
店員も主人もない年の暮　竜太
年の暮内職の手もリズミカル　マサエ
目が覚めて夢でよかったこともあり　義宏
湯たんぽを抱く明け暮れ今日も過ぎ　岳人
病みし身はさしず役だけ年の暮　於千
青春の夢いつまでも老教師　圭太
年の暮予算狂わす請求書　宇宙太
青の子も泣き寝入りする暮の店　のぶ子
出稼ぎの家庭も明るい年の暮　万里
夢のような話も親は聞いてくれ　大吉
初詣夢一杯のバスにゆれ　聖二
夢よりも現実主義に今日を生き　一水
夢を見る指で突きたい子のえくぼ　兼洲
ふる里の山河夜行の夢を乗せ　都
今日の日を夢にまで見た晴れ姿　秋水
夢に見る故郷の丘もブルドーザ　信次
生きるための蜘蛛巣造りスタートす　比呂路

スタートを誤り飯場の灯は赤い　いわを
ハネムーン夢にとけ込む湯があふれ　梅里
黒い霧晴れそうでなく年も暮れ　好郎

どんぐり川柳会（大阪市）　川村好郎報

新しい財布になじむひまもなし　一人
新築の二階は残し店を開け　吸江
寒がりがママでよかった光熱費　芙巳代
電報の何度読んでも金送れ　草春
何もかも捨てて実った新世帯　一峯
新しいネクタイ寄り途したくなり　痴亭
ニューモード着ても恋には古風なり　史好
寒がりへ呼出し電話かかって来　集一
寒がりのくせにデートは先に待ち　弥生
新米のくせに理くつは堂に入り　努
新しい喜び乙女の紅ひく日　岳太
吉凶のどちらもある時来た電報　県吉郎
新しいだけが取柄の家を買い　生長
肥えたねとおせじ云ったが着それる　雪貞
祝電に気になる人の名前あり　幸子
手土産を持って社長に女客　双楽
生きるため蜘蛛新しい巣を作る　比呂路
結婚の日もある新らのカレンダー　薫風
新装へ且那が出した保証金　梅里
二日目の新年スピードよう出さず　白柳
うちの人信じておれど女客　好郎

まるべに川柳会　川村好郎報

大阪もきれいな空なりお正月　美幸
それぞれに年賀状来る子の育ち　瓢太
百出の議論結論生温るく　立児
お鏡も割って受験へ鞭を入れ　泉睦
安なった数の子今年もあたらない　幸子
いち早く革新派の賀状来る　星斗
そのうちの赤あざやかに賀状の絵　睦子
初出の日着つけがおくれすべり込み　奈美
借金で買った新居の松飾り　扇里
御利益のある百度石はよう光り　茂児
威勢よくいや応なしに来る初荷　好郎

備前川柳社　横山一声報

仏壇の灯が大望へ力添え　竜泉
子供より親が大望子にかける　楽天
重くないから大望は多く持ち　初美
大望の遠い遠い灯を見つめ　照路
大望へ恩師のむちのきびしかり　伊久野
大望はきれいな虹のように消え　浄美
大望を願う賽銭少なすぎ　一声
大望を抱いて初日の出を拝み　文平
大望があり不可能を考えず　胡風
大望へ一歩近づく低姿勢　柳風子
大望もむなしく夢のままなびく　秋月
世間の片すみにもある大望　裕美
女の子だからと大望の芽をつまれ　のぼる
大望は消えても望み又生まれ　柳子
大望があり山陽の詩を愛す　飴ン坊
大望は五十を過ぎてからわかり　久米雄
神様にだけ大望を話しとき　正洲

高知川柳社（高知市）　川竹松風報

日給月給の会社にある不満　伊津志
ボーナス日会社うきうきするムード　舞子
日の丸を出して会社の休業日　斐山
信用がおちた社債の整理案　蟠蛇
定年の技術を他社に拾われる　古城
美容院急がした髪が気に入らず　文子
急用をいつ迄待たす応接間　勝子
主人とは同窓でしたセールスマン　三平
ご主人は女に甘いとボチがほえ　香芳

雅号ぶっちゃけ話（27）

あいき

みやお

・宮尾あいき・

学者肌の伯父が名付親だと云う私の本名の愛喜を、ひらがなに直したのが私の雅号です赤ん坊の私にどう期待をかけてくれましたものか、愛して喜ぶ、愛されて喜こぶ。良い名をつけてくれたものです。でも漢字のままでは、男と間違えられる心配がありますので、せめて女らしくひらがなに致しました。川柳を知りましてからの私は川柳を心から愛し、川柳を通して人生の喜びを感じています。その意味も雅号あいきの中にふくんでいるつもりです。現在の私は川柳の為に長生きしたい。そう念願して日々を大切に過しております。

食糧品店　五十六歳

御主人を借りると悪友から電話　昌雄
条件をのんでるほうは主人側　一歩
女より男が見たい下着ショー　竹荘
大歩危と小歩危ここから土佐訛　紅雨
玉砂利を踏む日を年の始めとす　句念坊
極楽か地獄か紙の六文銭　未遂
姫ダルマ嫁いだ先へついて来る　夢迎
二人来てムードをつくるのも喫茶　松風
注射針子供がまんの目をつむり　大破
その顔は男を意識している目

かゝみ川柳社（岡山県）　池田古心報

年の瀬も明るい音で餅をつき　清水
紅餅が寿ぐ春に色を添え　晴
鏡餅床のダルマはまだ片目　今日平
ゲレンデで拝む初日へスキーバス　古心
この雪で転び転んでスキー場　老骨
森羅万象喜悦の中の初日の出　秋月
つつがなく家族揃うて初日の出　雅子
花火爆ぜる音電灯が島につき　蛙浪
早い手が伸びておこれぬ子の笑顔　美佐子
借金に早く日がたつ年の暮　周甫
愛人が早や来合せた初詣　碧人
早いもの勝ちと商魂そそりたて　弘司
いつまでもと信じた仲が先に逝き　稲平
確実に癌とは医者もよう言わず　たつよ
顔ぶれを見てから寄附帖筆をとり　あつき
顔ぶれをよんで内容かえて来る　文女

川柳あしなみ句会（姫路市）　岳詩報

酔うて見て一人の酒の味気なさ　河童
入院の父は病名知らぬまま　礎石
希望だけ聞いて採用にごす腹　光雨
ハワイ行決ったとこで夢が覚め　実男
初夢の大きさ話す人がいず　水客
初夢が想い出せない今朝の膳　但洲
初夢は大吉進学もう決まり　白溪子
実力があってみながらきらわれる　和敏
天下の横綱学歴など要らず　紅月
運強いだけ実力は三の次ぎ　立夏
スタートはトップテープをビリで切り　作洲
再婚と言うスタートをやり直し　孤逸
スタートへ羊りりしい顔で佇ち　笛珠
祖母も出て来て子の旅に気をつかう　葉香
塩でもむコツへ達者な祖母の指　万的
初夢は蝶捨てさせぬ夢になり　古内
肩書は無いが実力なら負けず　岳詩

岸和田市うしお川柳会　加仙報

欲のないのに惚れ込んで苦労する　青子
食欲の秋スタイルを気にしてる　すみれ
もみじ手でもう一方の乳房もつ　多佳子
温室の花がいじけた秋の空　たけし
代表の祝辞は耳を通り抜け　虹子
代表が度々替る内輪もめ　起人
成果には触れず代表団帰国　白光子
代表の記録へ小さい村が湧き　きさ子
代表の涙日の丸上げるとこ　操子
宝クジ一枚母の小さい欲　瓢人
泥に咲く花あり人生今日は　藤一
泥土がだんだん壁の色になり　かつらぎ
盛り場のネオン交番へ眩しすぎ　美咲
アリバイがそこから消えていた深夜　一骨
待つ人が来ぬ夜の毛糸編みちがえ　加仙

駒つなぎ川柳会（大阪市）　南柳報

新婚の部屋にほころぶ福寿草　小路
福寿草無口な乙女に似る固さ　眉水
松竹梅見落さないでと福寿草　柳信
福寿草咲かせて明治恋しがり　多津緒

直原玉青著
「新しい南画と俳画の描き方」
創元社出版
価二千円
本社でも取次ぎいたします。

年男来たと女にいじめられ　はやを
仲人の話聞いてる福寿草　良平
新婚へ手塩にかけた福寿草　規一朗
屠蘇含む妻の笑顔に福寿草　潔
年男などと神社の金儲け　竜雲
年男鬼を追い出す顔でなし　順三
一向にもてない愚痴へ酌いでやり　眉水
洋服に袴つけた年男　南柳

明朗川柳会　多幸報

黒い霧払う神風ないものか　芳
黒髪に染めて春を若返り　多幸
黒繻子の衿に洗髪よく似合い　久子
厚化粧しり目にほくろよく目立ち　源
腹黒がうまく泳いで社をささえ　茶々坊
仲人の黒着た妻が若く見え　清江
幕尻で黒星ならぶ勝負運　一休
黒豆は我家の自慢祖母が炊く　富士
黒髪が茶色に母の知らぬこと　浊水
黒髪を赤い毛にする昭和っ子　繁子
黒いサングラスが悪役の顔にする　弘生
黒く染めた洗髪にも春匂う　久江
開拓者夫婦ともども黒くやけ　生仏
白黒は碁盤ばかりか議会まで　一登

川柳たけはら（竹原市）　山内静水報

じいちゃんのお墓はいつも花いっぱい　清子
賑やかな今日は嬉しい誕生日　浩
サボテンがふるえているよ今朝の霜　日出夫
賑やかな家に鬼はそと福は内　勝彦
父兄会父ちゃんのヒゲよく目だち　宏子
卒業を控えた三年生の髪　浄美子
アイロンをかけ制服に悔はない　笑子
すぐ卒業校内ゆっくり見て歩く　延子
卒業へやっと心の友が出来　万司
試験日の前はやっぱり落ちつかず　洋子
当選と見て参謀の股火鉢　扇水
病菌が死にそうにない試験管　鬼焼
灰色の空へ故郷の事想い　松風
聖人も生きてる内は不遇なり　孚彦
満員車やき芋さげた客もおり　季賛
賑やかな顔ぶれ苦労のない話　呑竜
てのひらも花の如くに春ひらく　和尾
我が城は誰ればかりず二人きり　花仙
はっきりとしてる寝言にペン止まる　無門
人間にかえれる夜の息をする　政己
冬の日は短かしせめて詩を綴る　峯泉
ご馳走の一さら水屋で夜を明かし　花洞
節分や隣の鬼は入れまいぞ　子仙
初孫の笑顔にじいちゃんたる自覚　雅風
言論の自由日本に生きる幸　一路
怪我をして仰げばまぶし安全旗　不動
もうすぐに試験あそべるだけ遊ぼ　抑漁
赤ちゃんの爪が鋏をてこずらせ　菁居
春ちかし物音だんだん角がとれ　不朽
貧乏を突き刺すようなすき間風　静波
あか切れの手にしみじみと春の水　文晴
板前も試験明治を慌てさせ　春昇
笛のとうりに生徒が動く面白さ　蘭幸
太陽を春を待ってる花時計　静火
ゆっくりと歩こう風が押してくれ　静水
春よはる福は来いこい鬼来るな　房子
ご馳走がのどを通らぬ嬉しい日　マスエ
中学に入ってモヤシのようにのび　凡女
母を追う瞳たしかに見えはじめ　そのみ
ストーブのたぎる湯勿体なく眺め　房枝
エンゲージリングから自信ともし　ナルミ
丹仙に着かえてビールほしくなり　澄恵
しみじみと感謝の出来る歳になり　光子
ふり向けば相手の人もおじぎをし　茶女
マニキュアの色ぬり替えた参観日　よし恵
いさかいへ一歩下がった深呼吸　操子
張り合える仕事に楽し日々に生き　天石庵
何の芽かわからずそれも春は春　紫苑荘

ふじかげ短詩睦会（鳥取市）　藤本礎山報

祝い事すぐ父ちゃんは酒にする　のり子
お葬式出すのになんでお酒飲む　敬子
からい酒生甲斐と言う父わからない　カッチン
母さんが書くのに短詩父書かず　保夫
じゃあ又ネと言った母さんもう居ない　コッコ
よく叱る母さんだけど甘えて見　プッコ
仏壇にお酒供えて父も飲み　喬
同じ酒飲んでも好きな人嫌やな人　民子
旗日みな父の酒飲む為のよう　武士
母居ない上手に好きと言えるのに　梅野
嬉しいと言って泣いてるお酒のみ　恵子
成人式兄貴意張って酒を飲み　和宏
母さんの匂いがしてた姉の胸　敏彦
祝福の酒を姉さん泣いて飲み　富子

以上、小、中学生

父帰るカバンの中の洋酒瓶　秀雄
飲んで来た父が土産で言い訳し　吉春
酔ひつぶれる迄はストップ利かぬ人　冨夫
快心のプランを抱いて宴に座し　忠志
カンパイをしたのに社長まだ飲む気　勇仁
母の味茶漬けにさえも差をつける　英子
母居らぬ食事の味が寂しい日　一代
友達の母が釦をつけて呉れ　明
パチの冴え開く宴会が騒がしい　和枝
晩酌の二本目ストップかける母　泰嗣
酒ぐせへストップ母は目で知らせ　昭好
籔医者と言いつつ父は共に飲み　清久
手料理をする姉母の味がする　政子
山の幸野の幸母の味で冴え　征也
老境へまだ懐かしい母の味　久人
母の味隣りの匂いで思い出し　長平
目玉焼する度恋し母の味　大治郎
母の味こうも違うかとろろ汁　広司
旅帰り母の味噌汁うまかった　克秋
同じ味ですヨと母が残りもの　鎮也
犬さえも母がやる餌はみんな食い　多鶴子
わびしさをまぎらす酒に湧く自嘲　佳女
遠い日の母に似て来る妻の声　礎山

宴会・折詰・出張パーティ
大勇
阿倍野区松崎町
TEL (623) 5031・5032
南区畳屋町三ツ寺センター
TEL (211) 9184

——・九輪水煙・——

南大阪川柳会で、この二十日に須崎豆秋七回忌句会が催うされる。もう七年にもなるのかと今さらのように指を折ってみた。

「川雑」時代に、一三夫さんの企画で「頂上会談」というのを豆秋さんとやったことがある。当時米ソの頂上会談があったのだが、ぼくらの「頂上」とは、アタマの光りのことだった。一三夫さんらしいアイデアで今思うと苦笑を禁じ得ないが豆秋さんにも川柳塔を見てもらいたかった。本社に雑誌がないので市内の書店へ宣伝用の五冊を買いに回わった。ありがたいことである。（清水白柳）

六月号発表（4月15日締切）

川柳塔（10句）　中島生々庵選
近作柳樽（10句）　北川春巣選

課題吟（各題5句以内）

「信　号」　関戸宗太郎選
「視　察」　大森娯句楽選
「童　顔」　新岡回天子選

★川柳塔の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳笑をご使用ください。

七月号発表（5月15日締切）

川柳塔（10句）　中島生々庵選
近作柳樽（10句）　北川春巣選

課題吟（各題5句以内）

「足　」　清水一保選
「エリート」　麻生アート選
「古　書」　佐野卜占選

★原稿は四百字詰原稿用紙に六枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

本社四月句会

日時　四月七日（金）午後六時
会場　自安寺（妙見さん）
市電千日前下車スグ北側
（電話211・1478番）

兼題　柳話　川村好郎
「コンクール」　河相すゝむ選
「地　位」　傍島静馬選
「光　線」　正本水客選
「洗　う」　西尾栞選

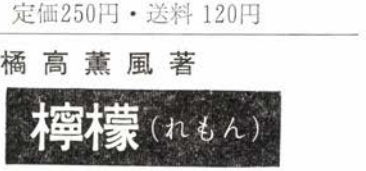
席題　三題（題と選者は当日発表）各題三句
会費　百五十円

★投句だけの方は切手50円封入
★電話での投句や訂正はご遠慮願います

大阪市南区鰻谷仲之町20
川柳塔社
電話　大阪（271）3985番

5月の兼題　「砂」　「ガレージ」
「手」　「予感」

麻生路郎著
★新川柳鑑賞★
定価250円・送料120円

橘高薫風著


送料共 500円

疲労・神経痛

治療効果を高めた活性ダブルB₁構造

吸収がよく効果が強く長く続く

いやな臭いが全くありません

神経痛・疲労・リウマチ・筋肉痛

肩こり・五十肩・食欲不振・腺病質

仮性近視・脚気・便秘・糖尿病

目や耳の障害などに

5mg　120錠・250錠・500錠

25mg　30錠・60錠・120錠・250錠

50mg　30錠・60錠・120錠

活性ビタミン複合剤

ハイ-ベストン®

タナベ

MSC

常に研究し前進する田辺製薬

★〝川柳雑初篇研究〟は、本誌にはなくてはならぬ偉大な光彩である。早く四ページ建てにしたいのだが、まだその機を得ないのが残念。

★高士野鞍馬氏の〝川柳戦国志〟や、東野大八氏の〝大陸もの〟ある本誌自慢のものだ。ともに毎号好評でありがたい。

★前月号の女流作家の特集は思ったとおり評判がよかった。なによりも難解な文字がすくないだけでも読みよい。

★三月号の表紙に黒のカスレているのが五十部ばかりあったので、それをハネておいたのだが全部出てしまった。新購読者のご紹介もそんなわけで、書店からひきあげてくるまでお待ちねがうことになり、こんなのをうれしい悲鳴というのであろう。

★新カナのことをよくたずねられるのだが、「川雑」時代にもなんどか書いたように「新妻」は〝新しい・妻〟で二語になるこの場合は〈にいづま〉と書くが「稲妻」の場合は、一語だから〈いなずま〉と書く。おなじ〝妻〟という字を使っても、二語は「つま」で、一語は「ずま」である。つまり二語は旧カナ一語は新カナとおぼえてもらうといいようにおもう。

―2DK―

★本誌では「花の様に」は「花のまうに」と書き直している。今の若い人なら「花のサマ」と読むからである。

★「思いっょ」は「思いっつ」

★「くれぐゝも」は「くれぐれも」

★「思う丈け」は「思うだけ」に。ETC。

★個々にではあるが、統っていきたい。ご協力ください。

★本社の近くにビルが三つも建ち、二階の編集室からは雲の流れや柳の青が目にうつらなくなつてしまつた。ちょっとわびしい。（不二田・三夫）

定価　百二十円（送料六円）

年年分　七百五十円（送料共）

一年分　千四百四十円（送料共）

昭和四十二年三月二十五日印刷

昭和四十二年四月　一　日発行

大阪市南区綿谷町二丁目三番地

編集兼発行人　中島蓬太郎

印刷所　大阪市南区綿谷町二丁目三番地　大陽印刷株式会社

大阪市南区綿谷町二丁目三番地

発行所　川柳塔社

電話大阪・二七一一・九八五番

振替口座大阪・三三三六八番

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十二年三月二十五日 印刷
昭和四十二年四月一日発行（毎月一日発行）

川柳塔 四月号

定価 百二十円（送料六円）

未知の世界にいどむ
あやめ池大探検博
開催中→6月4日まで　後援…大阪読売新聞社
科学と空想の未知の世界をさぐる楽しい探検…火星基地や陸の秘境　海底の神秘　原子怪獣や宇宙怪獣も登場する"大探検博。　遊園地のスピードとスリルとユーモアの乗りものはあやめ池自慢の遊戯施設
円型大劇場は日本歌劇団春のおどり15場…連日公演
▶野外劇場では日曜祝日に豪華アトラクション開催
あやめ池駅前が会場…入場料180円こども90円
近鉄各駅から割引入場券つき乗車券発売中
近鉄 あやめ池遊園地

一番よい酒
うまい酒
清酒
菊正宗
宮内庁御用達
菊正宗酒造株式会社
神戸・灘・御影